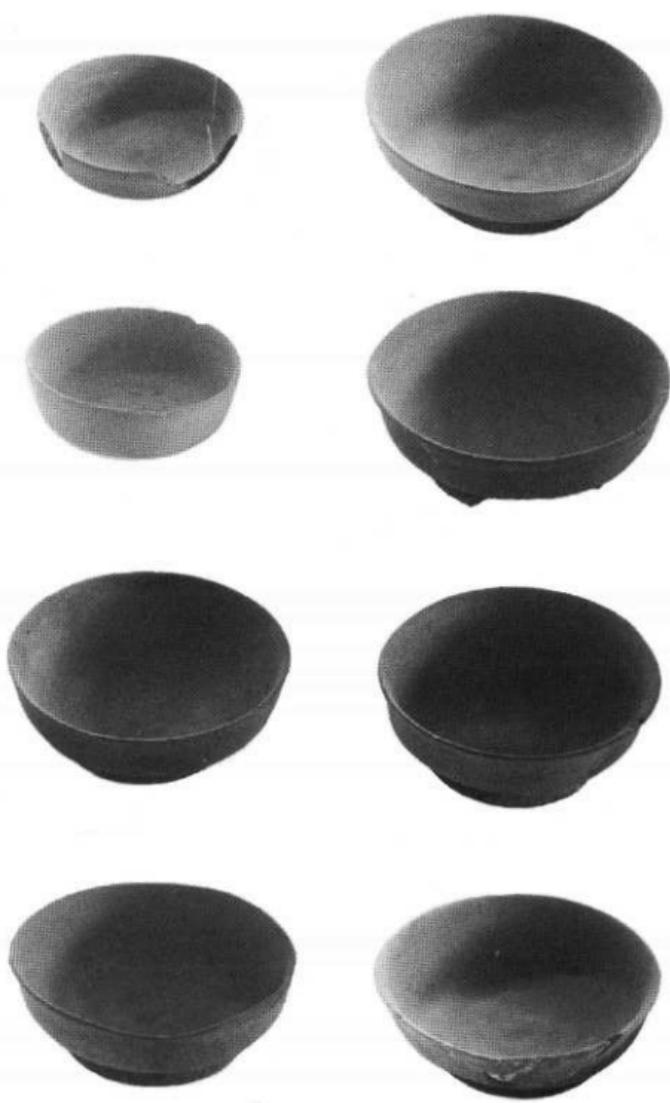


圖版 14  
第3号横穴墓  
遺物(2)







# 上ノ原地下式古墳群発掘調査

西諸県郡須木村大字中原字上ノ原1754番地1

県文化課主任主事 岩永哲夫  
県総合博物館学芸課歴史科主任 茂山護



## 本 文 目 次

I	所 在 地	( 岩 永 )	8 5
II	調査に至る経緯	( " )	8 6
III	調査の結果		8 6
1.	地層の状態	( " )	8 6
2.	第 1 号地下式古墳	( " )	8 8
(1)	遺 構		8 8
(2)	遺 物		9 0
3.	第 2 号地下式古墳	( " )	9 1
(1)	遺 構		9 1
(2)	遺 物		9 1
4.	第 3 号地下式古墳	( " )	9 4
(1)	遺 構		9 4
(2)	遺 物		9 4
5.	第 4 号地下式古墳	( " )	9 7
(1)	遺 構		9 7
(2)	遺 物		9 7
6.	第 5 号地下式古墳	( " )	9 9
(1)	遺 構		9 9
(2)	遺 物		9 9
7.	第 6 号地下式古墳	( " )	1 0 2
(1)	遺 構		1 0 2
(2)	遺 物		1 0 2
8.	第 7 号地下式古墳	( " )	1 0 4
(1)	遺 構		1 0 4
(2)	遺 物		1 0 4
9.	第 8 号地下式古墳	( " )	1 0 6
(1)	遺 構		1 0 6
(2)	遺 物		1 0 6

10. 第9号地下式古墳	(茂山)	108
(1) 遺構		100
(2) 内部の状況について		110
(3) 遺物		113
(4) 小結		117
(5) 9号墓被葬者の性格について		118
11. 第10号地下式古墳	(岩水)	120
(1) 遺構		120
(2) 遺物		122
IV 結語	(#)	124

### 挿図目次

第1図 遺跡所在地	85
第2図 地下式古墳分布図	87
第3図 上層図	88
第4図 第1号地下式古墳実測図	89
第5図 1号出土遺物実測図	90
第6図 第2号地下式古墳実測図	92
第7図 2号出土遺物実測図	93
第8図 第3号地下式古墳実測図	95
第9図 3号出土遺物実測図	96
第10図 第4号地下式古墳実測図	98
第11図 4号出土遺物実測図	99
第12図 第5号地下式古墳実測図	100
第13図 5号出土遺物実測図	101
第14図 第6号地下式古墳実測図	103
第15図 第7号地下式古墳実測図	105
第16図 7号出土遺物実測図	106

第 17 図	第 8 号地下式古墳実測図	107
第 18 図	8 号玄室内調整痕模式図	108
第 19 図	第 9 号地下式古墳実測図	109
第 20 図	櫛付着状態実測図	111
第 21 図	9 号出土剣・鉄鎌・刀子実測図	114
第 22 図	1 号人骨左前腕着装平玉の連織出土状況実測図	116
第 23 図	櫛実測図	117
第 24 図	第 10 号地下式古墳実測図	121
第 25 図	10 号出土遺物実測図	122

## 図 版 目 次

図版 1	遺跡全景	127
図版 2	土層の状態	129
図版 3	第 1 号地下式古墳 (1) 羨門閉塞石状況 (2) 玄室から見た閉塞石	130
図版 4	" (1) 玄室内状況 (2) 刀子出土状況	131
図版 5	第 2 号地下式古墳 人骨出土状況	132
図版 6	" (1) 鉄鎌出土状況 (2) "	133
図版 7	第 3 号地下式古墳 (1) 玄室内状況 (2) 玄室内置石状況	134
図版 8	第 4 号地下式古墳 (1) 竪坑部及び閉塞石 (2) 玄室内状況(手前・人骨)	135
図版 9	第 5 号地下式古墳 (1) 竪坑部 (2) 閉塞石及び玄室	136
図版 10	" (1) 玄室内遺物出土状況 (2) 玄室内遺物出土状況(拡大)	137

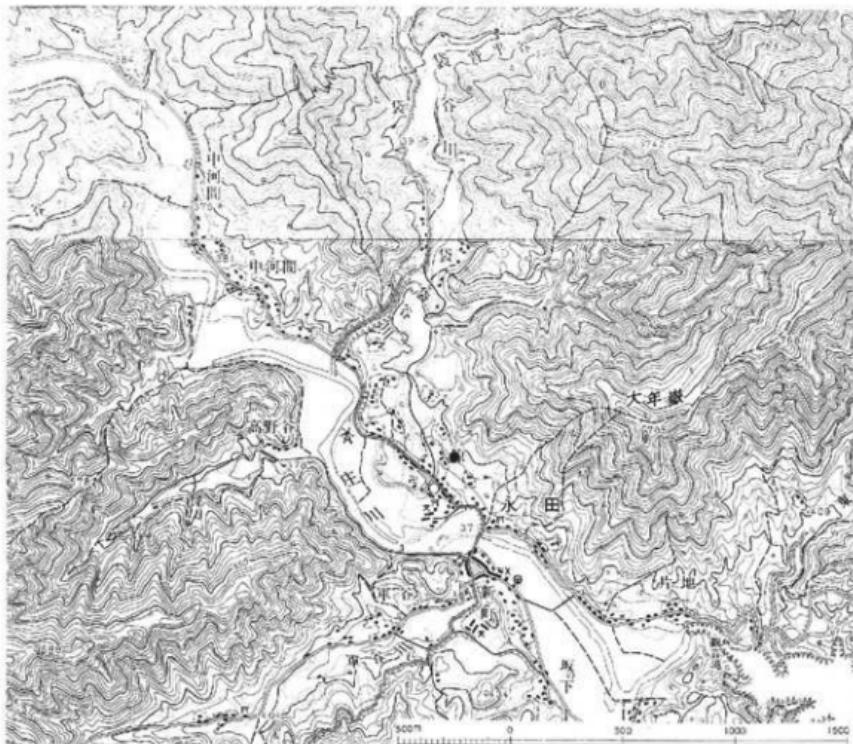
図版 1 1	第 6 号地下式古墳 (1) 葵門部	138
	(2) 葵門から見た玄室内	138
図版 1 2	第 7 号地下式古墳 (1) 閉塞石状況	139
	(2) 遺構全景	139
図版 1 3	第 8 号地下式古墳 (1) 通景	140
	(2) 竪坑部閉塞状況	140
図版 1 4	" (1) 葵門から見た玄室内	141
	(2) 玄室内人骨及び鉄鏃出土状況	141
図版 1 5	第 9 号地下式古墳 遺構閉塞状況	142
図版 1 6	" 遺物出土状況	143
図版 1 7	" 刀子出土状況	144
図版 1 8	" 出土柳・平玉	145
図版 1 9	第 9 号地下式古墳 橋の付着状況	146
図版 2 0	" 出土遺物	147
図版 2 1	第 10 号地下式古墳 (1) 玄室内状況	148
	(2) 遺物出土状況	148
図版 2 2	" (1) 竪坑部	149
	(2) 閉塞石	149
図版 2 3	1 ~ 2 号出土遺物	150
図版 2 4	3 · 4 号出土遺物	151
図版 2 5	5 · 7 · 10 号出土遺物	152

## 表 目 次

第 1 表	須木村古墳指定状況	86
第 2 表	1 号玄室壁面調整法	90
第 3 表	5 号出土鉄鏃一覧表	102
第 4 表	7 号玄室壁面調整法	104
第 5 表	上ノ原地下式古墳群一覧表	123

## I 所 在 地 (第1図)

西諸県郡須木村大字中原字上ノ原 1754番地1



第1図 遺跡所在地 (●印)

遺跡は、須木村の中央を蛇行しながら南流する本庄川の左岸、大年嶺から急傾斜で西に下りる山地の盤付近標高390m前後の地点に位置する。国道265号線を熊本方向に向かうと、右側高所に望むことができ、現在の役場庁舎は左側道路沿いに近く所在している。本遺跡は県内に於ける多くの地下式古墳築造場所と異なり、第2図でも明らかなように斜面に營まれていることも特異性の一つとしてあげることができるが、平坦地の少ない須木村においては当然のこととも言えよう。もともと山林であったこの地は戦後の開墾作業によって表土

も幾分掘削されていると思われ、10基の地下式古墳の中には、表土が薄くなつたため（地層そのものが堅固でないためもある）、玄室天井部が陥没して久しいものもあつた。隣接する山林内には、昭和9年4月17日須木村古墳として地下式古墳4基が県指定史跡になつてゐる。県指定の地番等は下表のとおりである。

第1表 須木村古墳指定状況（昭9.4.17県指定）

番号	字名	地番	地目	地積	種別
1	上ノ原	1,753ノ1	山林	3畝00	地下式古墳
2	〃	1,753ノ2	〃	〃	〃
3	〃	〃	〃	〃	〃
4	〃	〃	〃	〃	〃

## II 調査に至る経緯

昭和55年5月14日、須木村役場庁舎建設予定地の敷地造成工事中、地下式古墳2基が発見された。その後、重機による渓門閉塞石露出という形で次々に発見され、9基を数えるに至った。遺跡発見後、周辺の工事は一時中止され、発掘調査を5月20日から実施することになった。調査は須木村教育委員会、須木村建設課の協力を得て、県教育委員会が調査主体者になり、文化課主任主事岩永哲夫が調査を担当した。27日から県総合博物館歴史科主任茂山義の参加をみて、5月30日をもって1号から9号までの発掘調査を終了した。

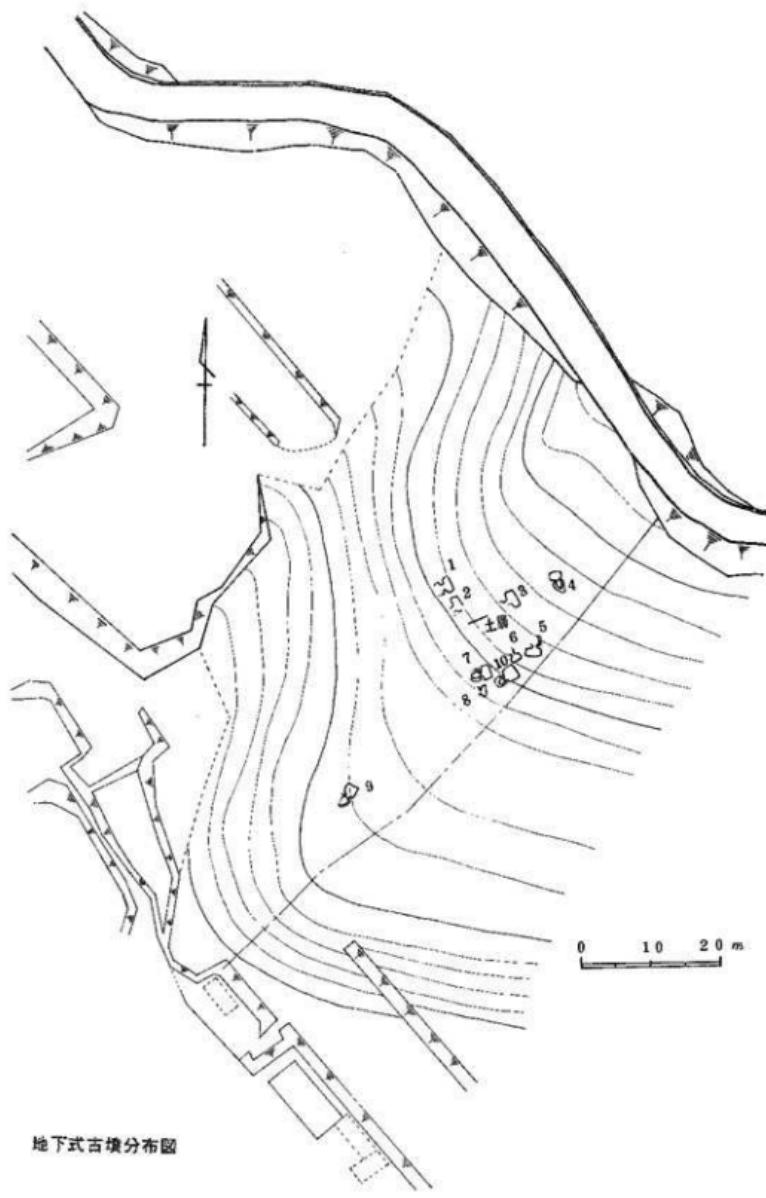
その後、周辺の工事が進む中で第10号が発見され、6月24・25日岩永が調査にあつた。また、出土人骨の調査には長崎大学医学部第2解剖学教室松下孝幸助手、分部哲秋助手ほか2名の方々があたられた。

その他、県文化財保護指導委員真方良徳氏には調査中多大な御協力をいただいた。

## III 調査の結果

### 1. 地層の状態（第3図）

遺跡地全体を構成する基本的な層序は、0・表土（黒色土層）、I・黒色土層、II・赤土



第2図 地下式古墳分布図

ヤ層、Ⅲ・黒褐色土層・Ⅳ・褐色土層（粘質）、V・砂質層と続いている。地下式古墳の構築された範囲は上記の全層に亘っており、堅坑をI・黒色土層から掘り込み、堅坑・羨道・玄室の底面はV・砂質層にまで至っている。遺跡の中心付近（第2図参照）での土層を観察すると、北東から南西へ約15度の傾斜を持ち、各層の厚さは0層・1.5~2.5cm、I層・1.5~3.5cm、II層・1.5~3.0cm、III層・2.0cm前後、IV層・3.0~5.0cm、V層・5.0cm以上となっている。

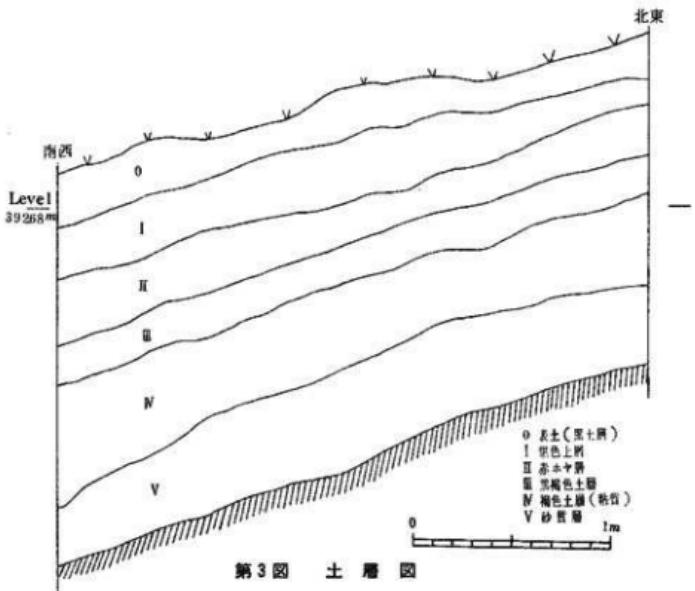
## 2. 第1号地下式古墳

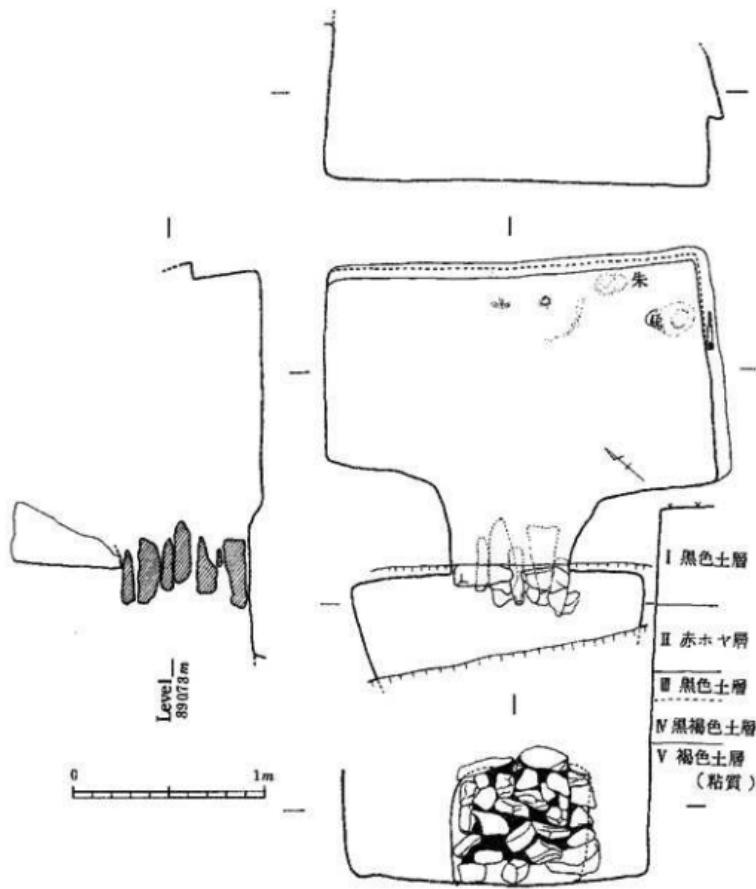
### (1) 遺構（第4図）

群の構成の中では北西隅に築造されたもので、等高線に沿って2号と並列して存在する。横穴墓において見られる築造法の如く、共に低位に堅坑、高位に玄室を構築している。1・2号の主軸間の距離は3.5mを測る。

調査前の状況は、堅坑部の前面が削り取られ、玄室天井の一部が陥没していた。主軸の方位はN 5°Eである。

堅坑は、全体形状は羨門部を底辺とする三角形状をなすものと思われる。羨門付近での幅は1.50m、羨門から右側部分の長さ3.8cm、左側部分の長さ5.2cmを測る。坑底から現地





第4図 第1号地下式古墳実測図

表までは 190 cm の深さである。

表道は堅抗のわざかに右寄りに穿たれ、表門幅 60 cm 高さ 66 cm、長さは右側で 35 cm、左側で 45 cm を測るが、玄門では幅 85 cm にまで広がっている。長さ 30 cm 前後の礎石を堅坑から突込んだ形の閉塞である。

玄室は、両袖型の平入りで寄棟造りを窺わせる不整形の長方形である。右壁及び奥壁には床面から 35 cm の位置に幅 7 cm の棚状施設を有しており、天井に向けての壁面は傾斜しているが、左壁はほぼ垂直に大井に向かっている。玄室の大きさは長さ 110 cm、幅 200 cm を測り、右壁が長く 115 cm、左壁は 90 cm で短い。天井は剥落のため形状・高さ等不明である。

地下式古墳の築造工法の問題であるが、玄室内壁面の削り痕（調整痕）を観察すると第 2 表のようになる。

第 2 表 1号玄室壁面調整法

調査場所		調整方向	工具
右壁	棚上	横	先丸工具 (刃幅 1.5 cm)
	棚下	縦	
奥壁	棚下	中央から右部分 横(右方向)	(刃幅 1.5 cm)
	中央から左部分	横(左方向)	
左壁	棚上	横	
前壁		縦	
		不明	

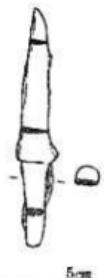
## (2) 遺物(第 4・5 図)

人骨は 1 体が残存しているが、頭部のみはっきりしており、玄室奥寄りに右壁(南東)を頭にして埋葬したものである。頭蓋骨は黒く変色しているが、顔面には朱を塗している。

副葬品は右棚上に鋒を奥に向かって刀子 1 本のみであった。

### 刀子(第 5 図)

総長 12.8 cm、身長 8.2 cm、棹幅 0.2 cm を測り、柄部片側には木質部が良好に残っている。



第 5 図 1 号出土遺物実測図

### 3. 第2号地下式古墳

#### (1) 遺構(第6図)

1号に隣接しており、主軸の方位はN 5°Eである。

堅坑は後門閉塞石ぎりぎりまで削り取られている。閉塞石は1号同様堅坑から後道へ突込んだ形をしている。

後道は、後門での幅6.5cm、中央部幅6.0cm、玄門での幅8.7cmが示すように中央部で最も狭まり玄室に向けて曲線をなして開いている。高さは約5.0cmである。

玄室の形態は両袖型平入り寄棟造りをなし、平面的には長方形をなしているが、全体的に左方に寄った構造である。床面での計測値は長さ11.5cm、幅21.0cmで、右・奥・左壁に棚状施設を有する。右壁では床面から2.5cmの位置に幅1.7cmの棚を、奥壁では2.5cmの位置に最大1.9cm幅、左壁では2.8cmの位置に最大1.3cm幅の棚をそれぞれ有している。天井の形状は四隅の棚上から傾斜をもって天井中央に向かって立ちあがり、棟端へ収束し寄棟状を形成する。棟の長さは1.9.5cmを測る。天井までの高さは最大8.7cmである。

玄室内成形調整痕は、右・奥壁の棚上部分において観察できるが、いずれも左方向のものである。工具は1号と同じく先丸である。

また、棚から上の右壁には全面に亘り朱を施し、奥壁中央の棚上部分にも薄く塗朱している。棚に置いてある直刀下2ヶ所には朱玉が敷かれ、溶けて流れた朱が棚壁にも付着し赤く染まっている。

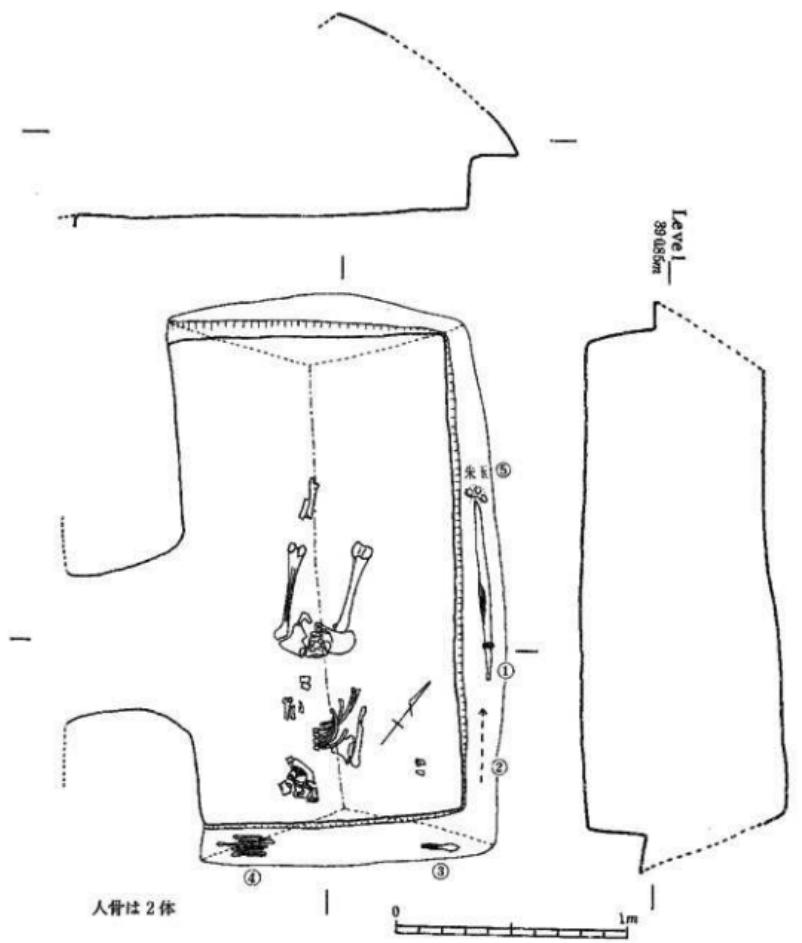
#### (2) 遺物(第6・7図)

人骨は2体残存しており、ともに右側(南東)を頭にして葬られていた。奥壁寄りの1体(2号人骨)は下顎骨のみであったが、入口寄りの1体(1号人骨)は頭骨はこわれていたもののほぼ完全に近い状態で、伸展葬されたものであった。1号人骨の頭部下には特に朱の量が多く朱書きされたものとみられ、顔面にも朱が施されていた。2号人骨下にも朱が認められた。

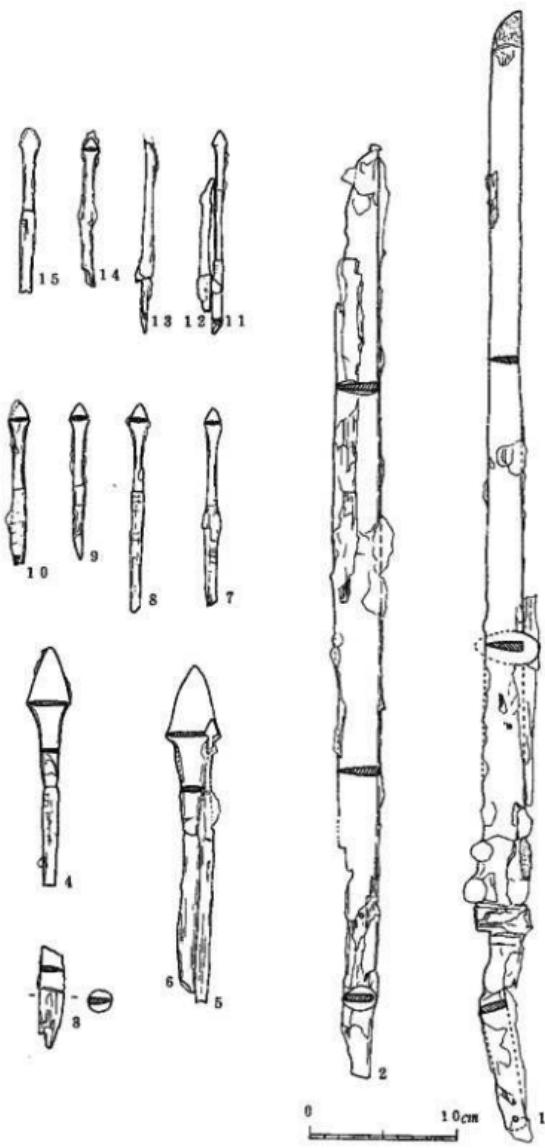
副葬品は、右側に齒先を奥に向けた鉄鎌1本(奥壁寄り③)と齒先を手前に向けた鉄鎌1本(入口寄り④)、奥側には鋒を左に向けた直刀2本(①・②、②は裏面落下により若干移動)があった。その他、刀子1本が発見された。

#### 直刀2振(第6図①②、第7図1、2)

1は総長76.8cm、身長60.8cm、身幅2.4cm、柄幅0.4~0.5cmの細身刀である。柄部には柄飾が装着され、柄頭近くに目釘穴1個が認められる。刀身には鞘の木質が部分的に付



第 6 図 第 2 号地下式古墳実測図



第7図 2号出土遺物実測図

着している。

2は、総長6.3cm、身長4.9cm、身幅2.8cm、横幅0.6cmを測り、目釘穴2個が認められる。稍の木質が残っている。

#### 刀子(第7図3)

身の先端が折損している。身幅1.7cm、横幅0.3cm、柄長4.1cm、柄部には鹿角装を施している。

#### 鉄鎌(第6図③④、第7図4、5~15)

4~6は平根鎌で変形直頭斧箭式、5~7~15は細根鎌である。

4は、総長1.6.2cm、鎌身9.6cm、最大幅3.0cm、6は、総長2.3.0cm、鎌身1.1.4cm、最大幅3.8cmを測る。5は6に銹着しており、総長1.9.2cm、鎌身7.4cm、最大幅1.0cmの極めて小型のものである。7は、総長1.3.2cm、鎌身7.2cm、最大幅1.1cmを測る。8は、総長1.4cm、鎌身6.0cm、最大幅1.2cm、9は総長1.0.6cm、鎌身5.6cm、最大幅1.3cm、10は総長1.1.0cm、鎌身5.8cm、最大幅1.4cmを測る。

### 4. 第3号地下式古墳

#### (1) 遺構(第8図)

第2号と第4号の中間地点に位置し、2号の8m東、4号の7m西にあたる。主軸の方向は、1、2号と同じく山上に向かって構築されている。主軸方位はN 35°Eである。

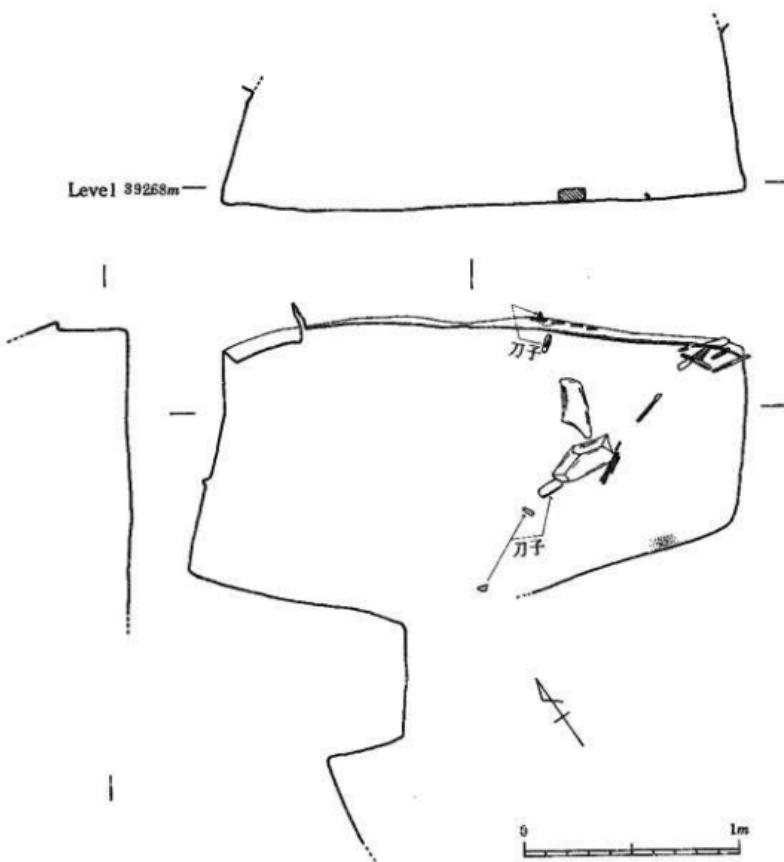
今向の10基の中では最も現存状態が悪く、堅坑はほとんど消滅し、玄室も過去の自然陥没のために全面に亘って埋もれていた。

堅坑及び羨道は僅かに残った部分的な痕跡によって推測せざるを得ないが、堅坑は羨門部を底辺とする三角形状のものとみられる。羨道については、左側において長さが計測できるのみで5.2cmを測る。

玄室の形態は、両袖型平入り形式で、左右壁の傾斜状態から寄棟造りと考えられ、長さ1.3.5cm、幅2.4.0cmを測る不整形な長方形である。右壁は短かく7.5cm、左壁は変形であるが1.0.5cmの長さがある。奥壁には最大7cm幅の狭い棚状施設があり、左方において一部龜裂を生じている。玄室中央右寄りには長さ3.0cm前後の2個の砂岩が残っていたが、人為的に玄室内に置かれたものか、羨門閉塞石の落下によるものか判断できない。

#### (2) 遺物(第8・9図)

人骨は1体も確認できなかったが、入口寄り右側に朱が認められたことから、あるいはここに頭部があったのではないかとも考えられる。



第8図 第3号地下式古墳実測図

副葬品はすべて玄室中央より右に所在し、刀子3本（その内、1本は壁に突き刺していた）  
鉄鎌14本以上が発見された。

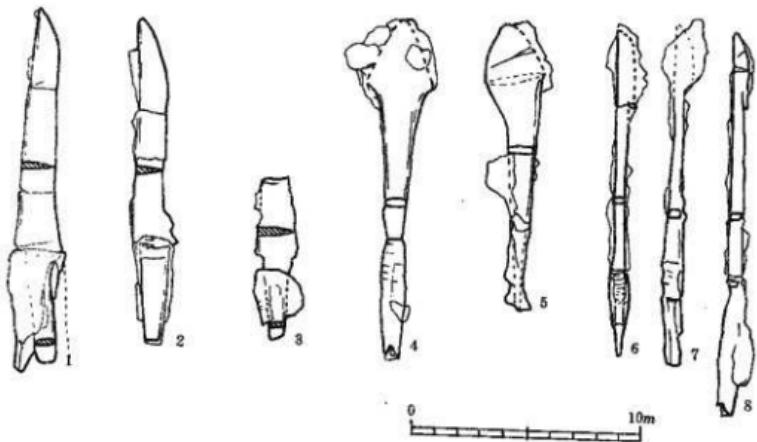
刀子（第9図1～3）

1は玄室中央から折損状態で発見されたもので、総長16.0cm、身長10.5cm、断面計測点での身幅1.5cm、棟幅0.3～0.4cmを測る。2は先端が奥壁に突き刺さっていたもので、総長14.3cm、身長9.7cm、棟幅0.4cmを測る。3は先端部が欠失している。現長7.0cm、柄部の長さ2.9cmである。

鉄鎌（第9図4～8）

銹化が著しく、鋒の状況が不明確であるが、4・5は変形主頭斧箭式に属する。4は総長14.5cm、鎌身の長さ9.5cm、最大幅3.0cm、5は総長12.2cm、鎌身9.2cm、最大幅2.8cmを測る。

6～8は、細根のもので片刃箭式に属する。12本以上がこの形式である。



第9図 3号出土遺物実測図

## 5. 第4号地下式古墳

### (1) 遺構(第10図)

最も高い位置に所在するもので、3分の北東7mに位置している。主軸の方位はN 40°Wである。玄室天井部が陥没して発見されたため、玄室の状態は良いものではなかったが、堅坑部についてはほぼ原形に近いものであった。

堅坑の底面形状は著しく不整形であるが、上部においてはほぼ三角形状ということができる。地表から坑底までの深さは165cmである。羨門閉塞石は、まず扁平長大な石を敷き、その上に次々に突込み、最後に上部には数個乗せ、外側には長大な石を立てかけている。

堅坑から玄室奥壁までの長さは255cmである。

羨道は短かく、右側では20cm、左側では30cmを測り、高さは不明である。

玄室は両袖型の椭円形状平入りで、左壁には床面から42cmの位置に幅2~3cmの狭い棚状施設がある。棚状施設について、奥壁・右壁に存在したかどうかは破壊のために確認し得ない。玄室の計測値は長さ135cm、幅180cmである。

壁面の調整痕は、左壁、右壁の一部、右前壁において確認できる。左壁においては、棚下壁は縦方向に、棚から上の壁面では中央から奥へ向けて横方向、手前は縦方向であり、右壁においては、前壁寄りに手前へ向けて横削り、右前壁においては右上から左下方向へ斜削りして調整している。

### (2) 遺物(第10・11図)

人骨は2体残存していたが、玄室天井部破壊のため、損傷が著しく、朱が付着していたかどうかは不明である。右(北東)を頭にして埋葬している。

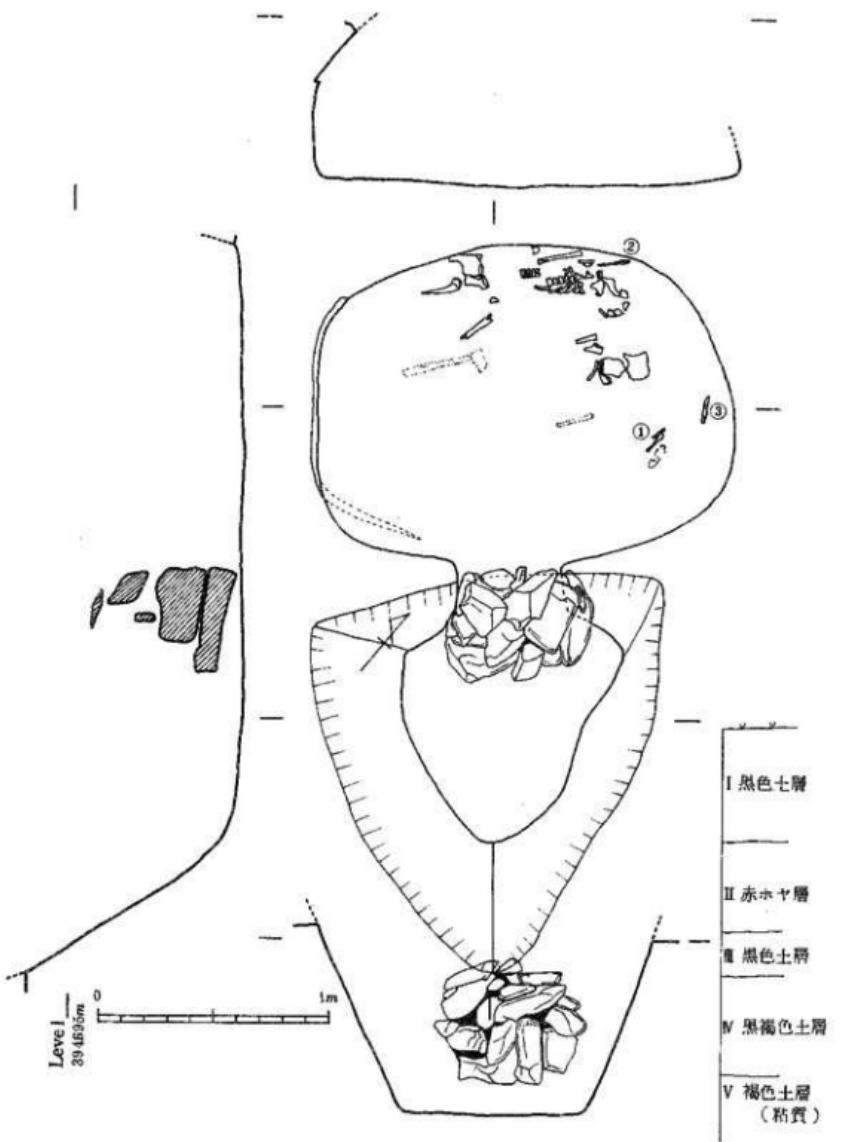
副葬品は、奥壁寄りに刀子1本、右壁寄りに刀子1本と鉄鎌3本が遺存していた。

刀子(第10図②・③、第11図1・2)

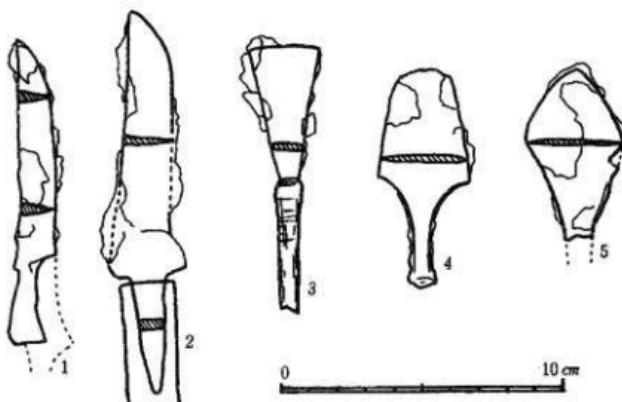
1は反りのみられるもので、総長10.7cm、身長7.5cm、身幅0.7cm、棟幅0.4cmを測る。2は、両開造りで総長14.5cm、身長9.0cm、身幅2.0cm、棟幅0.2cm、柄長4.2cm、柄部は、鹿角装である。

鉄鎌(第10図①、第11図3~5)

いずれも残存状態が悪い。3は方頭斧箭式とみられるが、変形圭頭斧箭式の鎌先が折れたものとも考えられ、断定できない。総長9.2cm、鎌身4.6cm、最広部2.4cmを測る。4は、変形圭頭斧箭式で、全長7.6cm、最広部3.2cmを測り、茎は細根である。5も同形式で、全長6.0cm、最広部3.2cmである。



第10圖 第4号地下式古墳実測図



第11図 4号出土遺物実測図

## 6. 第5号地下式古墳

### (1) 遺構(第12図)

本地下式古墳群の中で5～8号、10号の5基が近接して築造されているが、そのうちでは最高所に位置しており、10基の内唯一支室を籠に向けて築造しているものである。

主軸の方位はS 1°Eである。

堅坑は半腰の状態で、閉塞石も一部欠落していた。形状は方形とみられ、推定長100～110cmと考えられる。坑底から現地表まで165cmある。

羨道も半腰で左側部分のみ残っており、長さ55cm、玄門での幅55cmである。羨道の位置は玄室の中央より左寄りである。

玄室は、両袖型の平入りで隅丸長方形をなし、長さ115cm、幅216cmを測り、天井部は過去の自然崩壊により埋没していたため、形状は不明である。棚状施設は確認できなかった。玄室は堅坑底面より15cm内外掘り盡められている。

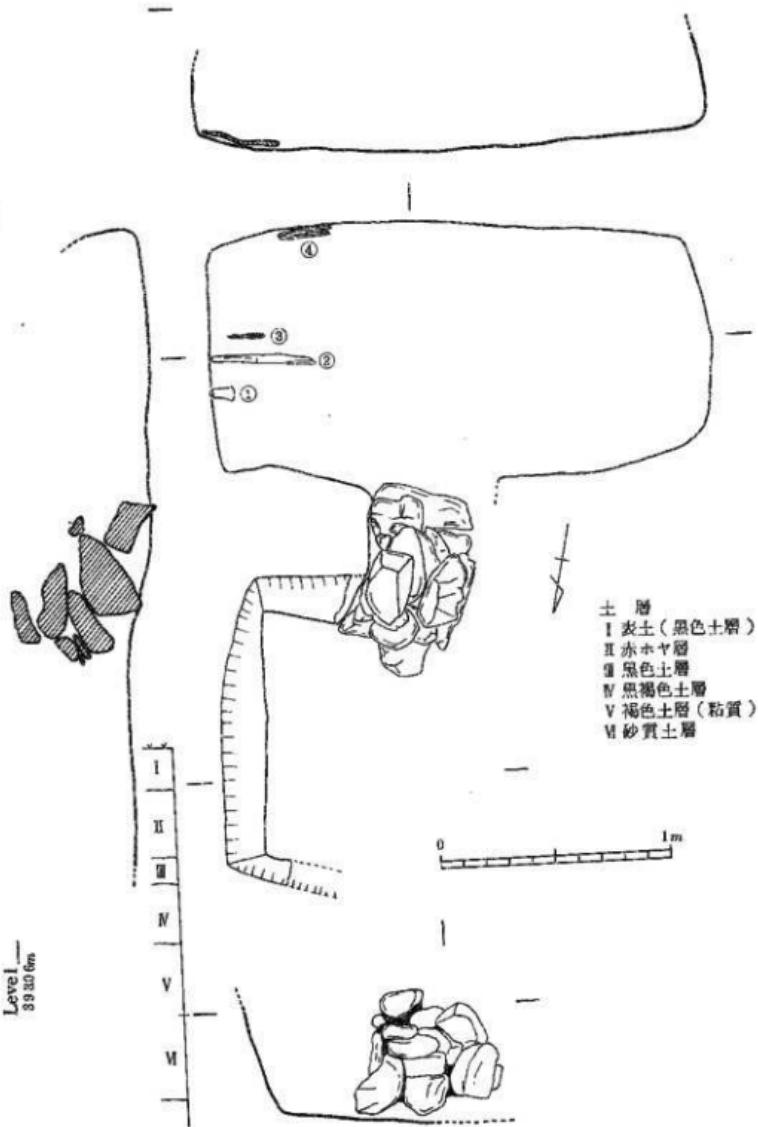
### (2) 遺物(第12・13図)

人骨は残っていないかったが、副葬品として玄室左壁寄りに直刀1振、刀子1本、鉄鎌4本、鉄斧1個が発見された。

#### 直刀(第12図②、第13図1)

刀長43.8cm、身長32.0cm、身幅3.0～3.3cm、棟幅0.6～0.7cm、柄長11.8cm、柄の厚さ0.5cmを測る。刀身の片側には鞘が良く残り、幅0.8cmの鞘尻状態も明瞭である。柄部の背には柄木を巻いた糸の状態が残っている。目釦穴1個が見えている。

Level  
39.30m



第12圖 第5号地下式古墳実測図

刀子(第12図③, 第13図2)

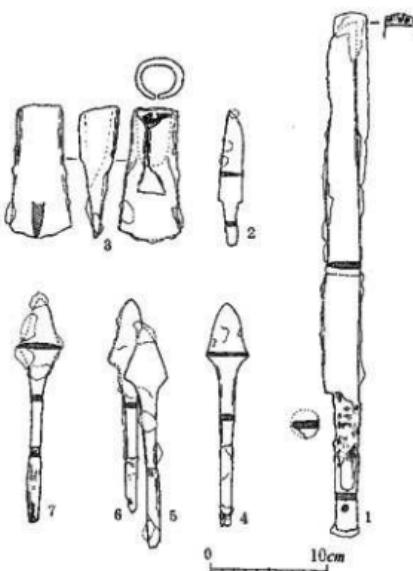
内闇造りで総長11.6cm, 身長7.8cm, 身幅1.7cm, 檐幅0.3~0.4cm, 柄長3.8cmを測る。

鉄斧(第12図①, 第13図3)

全長11.5cm, 刃先幅5.3cmを測り, 左右両側を内側に丸く折り曲げ袋部をしている。袋部は3.1×2.5cmの楕円形をなし, 内部に差し込まれた木質がそのまま接着して残存している。機能的には, 斧としてより手斧としての使用が考えられる。

鉄鎌(第12図④, 第13図4~7)

すべて同一形態をなし, 変形圭頭斧鎌式である。この形式には珍しく, 同一箇所にまとまって副葬されていた。計測値は第3表のとおりである。



第13図 5号出土遺物実測図

第3表 5号出土鐵錠一覽表

番号	形 式	總長(cm)	鍵身(cm)	最大幅(cm)	図面番号
1	変形圭頭斧箭式	1 8.5	11.5	3.8	第13図 4
2	"	1 9.0	12.0	3.7	" 5
3	"	1 8.4	13.6	—	" 6
4	"	1 9.2	12.8	3.6	" 7

## 7. 第6号地下式古墳

## (1) 遺構(第14図)

5号と10号に获まれた小型の地下式古墳である。5・6・10号の3基の分布状態は、1点を取り囲むが如く半円状に築造されている。6号の方位は、堅坑及び渓道の中心線を延長した線を主軸とするならば、S 7° Eである。

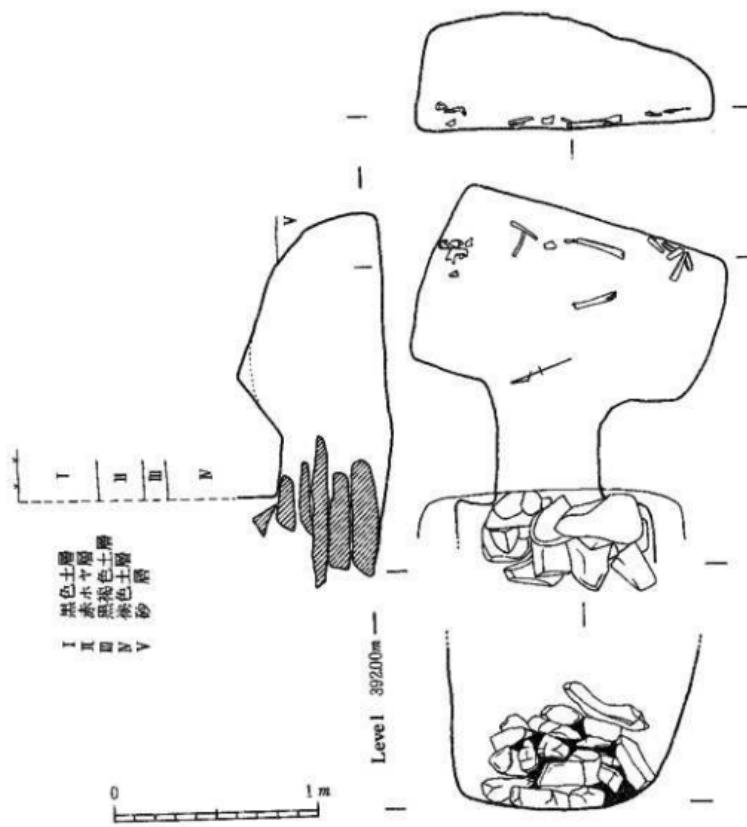
堅坑は半廻の状態で、形態は明らかではないが、玄室に相応した小型のものが推察できる。幅は羨門寄りで95cmを測る。表上から坑底までは180cm前後の深さである。閉塞石は良好に残っており、平石を基礎にして順次突込む形で積み重ねている。

渓道は約40cmの長さで、幅は羨門及び中央で51cm、玄門では70cmにまで開いている。高さは53cmを測る。

玄室は両袖の平入りであるが、平面形は堅坑、渓道の中軸線に対して17度右に振って造られた隅丸長方形をなす。玄室の長さは85cm、幅143cm、天井の高さは剥落がみられるが凡そ65cm位であろう。断面形はドーム形をなしている。棚状施設はない。壁面調整痕が一部に見られ、観察から削り工具は刃部の平らな幅4cmの手斧様のものと考えられる。

## (2) 遺物(第14図)

人骨1体のみであるが、玄室内に木・竹・草の根が張っていたため、清掃の際損傷している。頭部を左(北東)に向けて埋葬している。



第 14 図 第 6 号地下式古墳実測図

## 8. 第7号地下式古墳

### (1) 遺構(第15図)

山上に向かって築造されており、8号に隣接する。玄室天井の一部は陥没しているが、ほぼ原形に近いものである。主軸の方位はN 65°Eである。

墳坑は梯形を呈し、坑底での長さ115cm、幅は最大(奥門部)100cm、最小40cmを測る。坑底から地表までは凡そ180cmである。

誤差の計測値は、右側での長さ50cm、左側で56cm、幅は奥門で45cm、玄門で50cm、高さは62cmである。

玄室は、両袖平入りの長方形でドーム形天井である。長さ115cm、幅は奥壁では185cm、前壁で200cmを測る。天井までの高さは85cmである。砂質層を天井とし、褐色砂質層を床面にして構築している。

壁面調整痕は第4表のとおりである。基本的には右から左方向への打ち込みであるが、一部隅の角等では逆方向の左から右への削りもみられる。調整上当然のことといえる。

朱の付着状況は、右壁下半及び奥壁下半に付着しているが、塗布されたものではない。また、人骨の頭部周辺ほか人骨に平行して分布がみられた。

### (2) 遺物(第15・16図)

人骨は奥壁寄りに頭部を右(南東)に向けて埋葬された1体であるが、遺存状態が悪く、粉末化していた部分が多い。

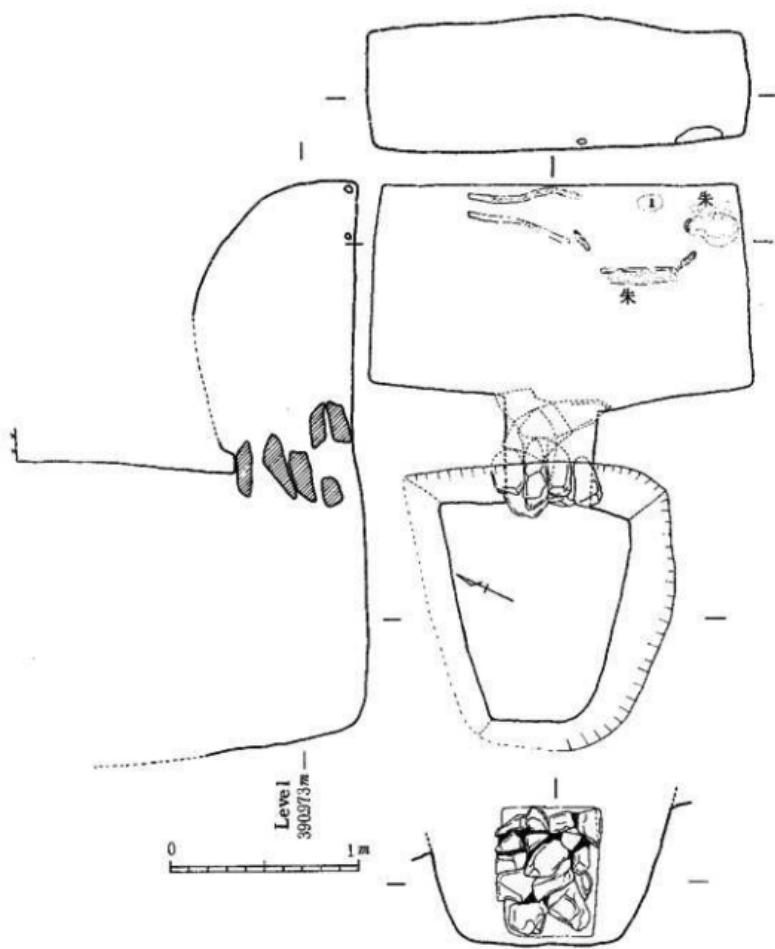
副葬品は奥壁寄りに刀子1本のみであった。

#### 刀子(第16図)

総長9.6cm、身長5.2cm、身幅0.5cmの小型刀子である。柄部には木質が残存している。

第4表 7号玄室壁面調整法

調整場所	調整方向	工具	
右壁	奥壁寄り	左	先丸工具 (刀幅1.5cm)
	前壁寄り		
奥壁	左部分	左	
	奥壁寄り	左	
左壁	奥壁寄り	左下から右上	
	左部分	左下から右上	
前壁	右部分	右	
	天井	左	



第15図 第7号地下式古墳実測図

## 9. 第8号地下式古墳

### (1) 遺構(第17図)

7号と並列状態にあり、2.5mの距離がある。6号とならび小型の地下式古墳である。主軸方位はN 7°Eである。

墳坑はほとんど削り取られているが、残っている壁面から推測すると、梯形と思われる。閉塞石のうち上部の数個は動いている。石積みの仕方は、他の多くが羨道に突込んだ形であるのに対して、基礎石の上に順次積み上げており、石積みとしては乱雑な方である。1個は玄室内に入り込んでいる。地表から坑底までは16.5cmの深さである。

羨道は、右側で長く4.5cm、左側で3.2cmを測り、玄門に向かって開いている。大井の高さは4.2cmである。

玄室は、両袖平入りドーム形で、長さ5.5cm、幅1.65cmを測る。室内的右側部分はある程度きれいに整形されているが、中央から左の部分は荒く整形しており、玄室構築途上までの作業で打ち切った様相を量している。人骨1体がぎりぎり入るほどの狭さである。壁面調整痕が明瞭に残っており、第17図に示すとおりである。左回りに突き進みながら築造したものと思われる。工具は丸刃の幅1.1cmのもので鍛先様工具と思われる。また、床面には、やわらかい砂を厚さ2cmほど敷いている。

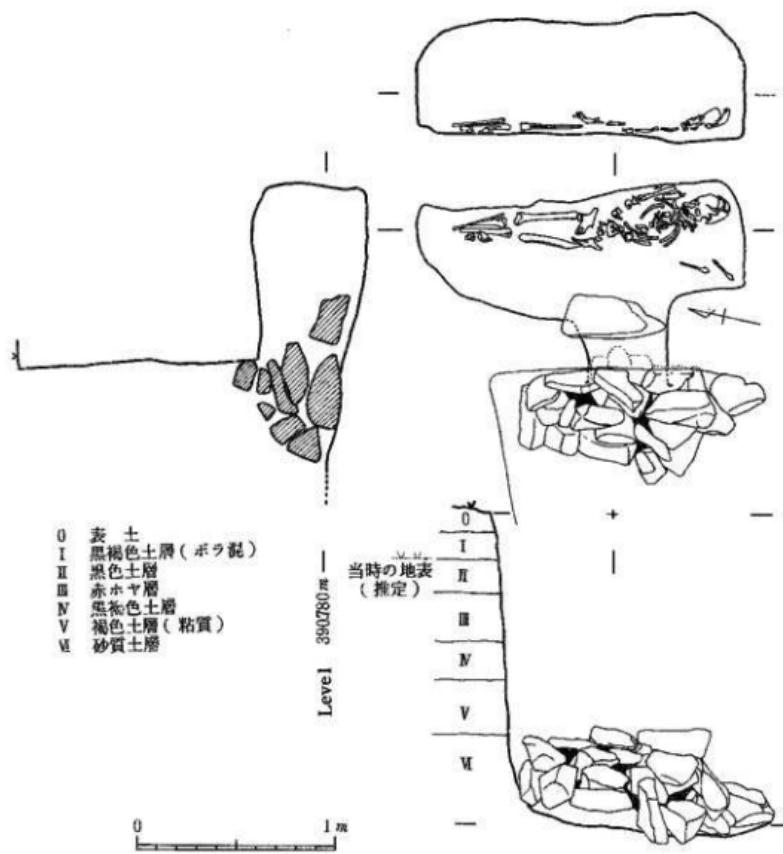
### (2) 遺物(第17図)

人骨が1体残存しているが、ほぼ完全な状態であった。右(南東)を頭にして埋葬している。

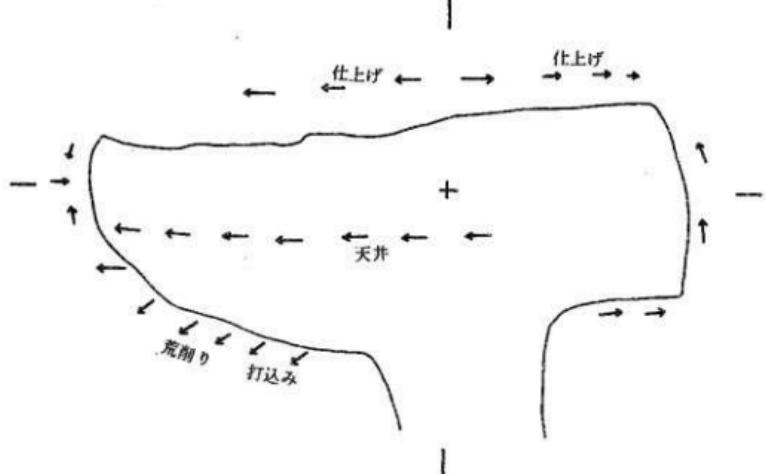
副葬品として、右壁寄りに鉄鎌2本が発見された。ともに変形牛頭斧箭式である。



第16図 7号出土遺物  
実測図



第17図 第8号地下式古墳実測図



第18図 8号玄室内調整痕模式図

## 10. 第9号地下式古墳

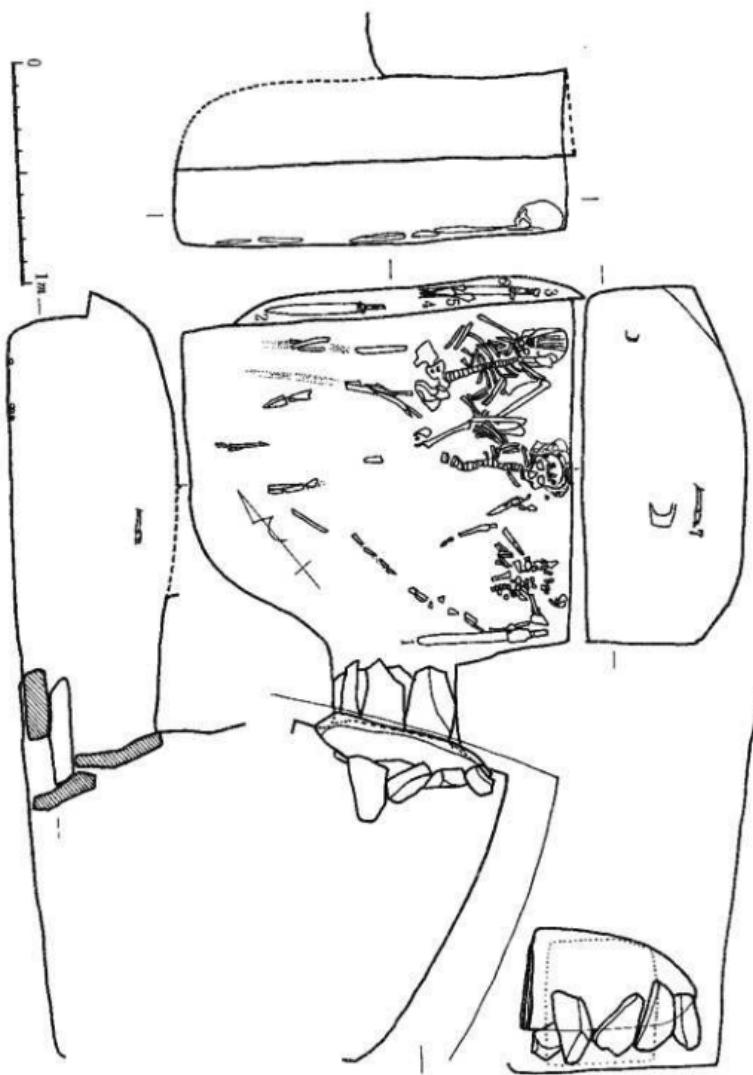
### (1) 遺構(第19図)

9号墓は、8号墓の南西に、水平距離にして25mの地点に1基だけ孤立して位置した遺構であり、堅坑を南に、玄室を北にして、斜面の下方から上位へ向かって墓室を構築していた。現地標高はおよそ388m、墓室床面高は385.82mが測定されており、現地表面からは約2m掘り下げられた粘土層中に床面を構えていた。丘陵地上位にあった1号から8号の墓群とはかなりの高低差があり、8号墓とでは5m、最高位に構築されていた4号墓とでは8mもの床面での比高をみた。

9号墓調査にあたっては、堅坑の掘り方をはじめ、墓室上層部の盛土の有無等、9号墓をとりまく墓域全面の精査が要請されたが、諸般の事情で完全に果すことができなかつたのは遺憾であった。

造成地境界に近い立地状況から、9号墓は大きく掘削された丘地断面に、堅坑から墓室側にかけて遺構の半ばを斜断した状態で発見されたのである。このために、墓室の大井部には大きく縦に亀裂が走っており、まことに不安定な状態にあった。全面掘削するには内部人骨への影響も考えられたことから、調査は、絶えず天井の落盤を気遣いながらの作業であった。

堅坑は、大半を削り取られていたため原形は明確ではなかったが、僅かに残された床面と



第19図 第9号地下式古墳実測図

羨門部の状況から、北東を基底とする半円形の掘り方をもつ堅坑であったことが推定された。堅坑基底面は、ほぼ垂直に掘り下げており、幅員 1.4 m が推測される。坑底は長さ 1.5 m、基底面での幅およそ 1 m の半楕円型になっていたものであろう。

墓室への入口にあたる談門は、堅坑基底面のほぼ中央に、幅 5.5 cm、高さ 6.0 cm の方形に開口していた。談道は長さ 4.5 cm、堅坑基底面と、約 15° 北へ斜向した状態にとりつけられていた。これは、今回の須木村墓群の中では異例であった。談道と玄室の境では床面と約 3 cm ほどの段差が観察された。

羨門の閉塞は、幅 2.0 ~ 3.0 cm、長 3.0 ~ 5.0 cm の割石 5 枚を、談道と平行して 2 段、20 cm ほどの高さに平積し、その上に、長さ 8.0 cm、幅 4.5 cm の割石を立てかける蓋石方式をとっていた（図版 1-5）。立てかけた蓋石の倒開を防ぐため、さらに前面に 5 個の礎石がたてかけてあった。蓋石や石積の周囲には、特に粘土の目盛りをした形跡は認められなかった。

玄室（墓室）は、片袖の流れた梯形状の平面構成をとっており、奥行 1.53 m、玄室中央部の幅 1.75 m、奥壁 1.82 m を計測した。談道から奥壁に向かって右側壁（東側壁）は、ほぼ垂直な壁面をつくり、長さ 1.55 m、中央部の高 7.5 cm、両端は 5.0 cm と弧を描いて低くなっている。左側壁（西壁）は掘削破壊され原形をとどめないが、奥壁より 9.0 cm 付近から曲面を描いて談道に連絡していたことが、床面の輪郭から推測された。

奥壁には、床面から 3.7 cm の高さに、幅 1.2 ~ 1.4 cm の棚状施設が、壁面左隅より 2.0 cm 付近から右隅に食い込むように 1.6 m の長さに設けられていた。側から大井にかけて壁面は曲面をなす。

天井は大半を失っていたが、東側に残る状況から寄棟風の円蓋になっていた模様である。中央付近での大井高は 7.5 cm しかなく墓室内での作業にはかなりの低姿勢を余儀無くさせられた。

垂直な東側壁面には、所々に幅 1.2 cm ほどの U 字形や、幅 5 cm の長方形の掘り跡がみられ、墓室の掘削に U 字形鋸先の着いた鋸や、手斧が掘り具として使用された事を示していた。1 号や 2 号墓で観察された壁面の塗朱彩色は、9 号墓では認められなかった。

## 2 内部の状況

### (1) 人骨の遺存状況（第 19 図）

玄室には 3 体の人骨があった。いずれも奥壁に向かって右手の東側壁・E 3.8° S を頭位としていた。便宜上、奥壁に接しこれと並行する人骨を 1 号人骨、中央に位置するものを 2 号人骨。談道寄りに斜めに埋葬されているものを 3 号人骨と呼ぶことにした。頭蓋骨をはじめ四肢骨も比較的の形態を保っていたのは 1 号と 2 号人骨であった。しかし、骨そのものの保存

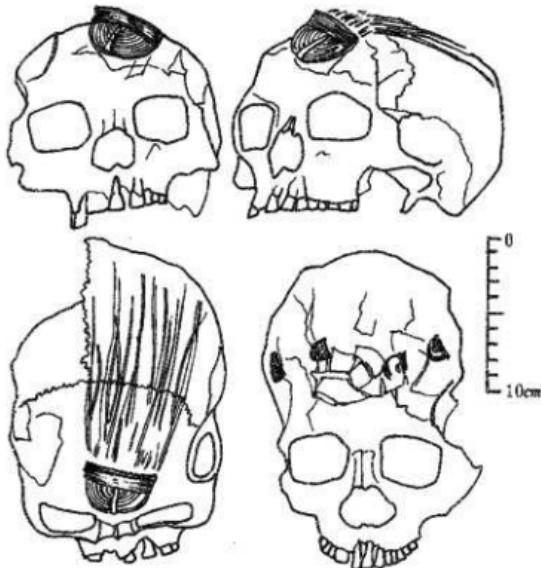
状態は悪く、床面にへばりつくような状態にあり、空気にふれ、時間の経過と共に次第に粉末化する始末で、四肢骨の取り上げは困難であった。骨格の遺存状況から判断して、9号墓の人骨は、両手を下腹部に組んだ仰臥伸展の葬法がとられていたものと推定された。

3号人骨は、3体の中ではもっとも遺存度が悪く、そのうえ頭蓋骨は原形をとどめないままに破砕されていた。四散した頭蓋骨片の様子から、臼歯化した段階で、何等かの衝撃が加えられ破砕したものと考えられる。

これらの人骨の遺存度を比べると、3体の人骨は、まず3号人骨が埋葬され、その後に1号と2号が合葬されたものと思われる。3号人骨頭蓋骨の破砕はその際加えられたのかもしれない。

何体もの合葬例には、よく初葬骨が片寄せられた集骨埋葬例があるが、地下式横穴では類例が少ない。過去に、西都市下三財中別府での例が挙げられる程度である。9号墓の場合、3号人骨と1・2号人骨との埋葬の時間差はきわめてわずかなものであったと推測される。

1・2号人骨について注目されたのは頭蓋骨の櫛の付着であった。



第20図 櫛付着状態実測図

## (2) 櫛の付着状態(第20図・図版19)

1号人骨の付着状態——前頭骨の中央額部分に、幅4cm、長さ3.8cmの半円状の大型堅櫛のつまみが、やや斜めに付着し、後頭部へかけて頭骨上には17・8条の黒線が歯齒の痕跡をとどめ、ほぼ櫛の原形を知り得るものであった。

これは、大型の堅櫛を額に半円状に表示した群馬県・高崎市鶴ヶ山古墳出土の埴輪女性像<sup>(2)</sup>や、同じ群馬県の塚廻3分、佐渡郡赤堀村田向井出土例など、女性の埴輪人物像に表示された櫛着装例そのものであり、結髪の根元に額の生え際から挿しこまれた櫛の着装状態そのままの実証例であった。

南九州の山深い須木の地下式横穴と、関東の古墳に、火和からは遠い東西の辺地に、同じ櫛の着装例が確認されたことは、当時の習俗に、地域を越えた共通習俗の存在を実証したものとして、風俗史の上からも注目すべき資料を提供したことになる。

長崎大学医学部松下氏の鑑定によれば1号人骨は女性骨であった。部分的に朱の付着した顔面の表情はおだやかで、縫合の間隙も広く、いまだ癒着現象のみられないことは、1号人骨が年若い女性であった事を物語るものであり、うら若き坐女像が想定されるのである。

2号人骨の櫛付着状況——1号人骨にくらべると、眉上弓の隆起がやや強く、顔面の表情も固く、男性骨の所見を裏付けている。しかも縫合の癒着がみられる事は、1号人骨よりかなり年長者であったことを示す。顔面は、全面朱に染っている。

2号人骨の頭蓋骨に付着していた櫛は、1号人骨のそれに比べ、いずれも小型の堅櫛であった。幅2cm、長さ1.8ほどの小型の櫛が、1個は右のこめかみ上部に下から上方へ向けて、他の1個は、左の額頭部分に右から左へ斜に付着していた。その間の前頭部生え際に2個、いずれも右から左方向へ斜に、4cmの間隔で付着していた。このほかに、頭蓋骨周囲にも5個の櫛が散乱していた。これらを加えると都合9個もの櫛を2号人骨は着装していたことになる。2号人骨の頭蓋骨の後方壁面との間には、棕櫚毛をおもわせる茶褐色の繊維状の有機物の塊りがあった。それは、あたかも頭骨からびり落ちたような状態にあった。これは何等かの付け髪即ち髪を着装していたことを想定させるものであった。頭骨周囲にあった5個の櫛は、いずれもこの有機物に付属して頭骨の右側に1個、後方に1個、左側に3個と散乱していたものであった。

なお2号人骨で注目されたのは、櫛の付着した前頭骨に無数の亀裂のあった事である。この亀裂のため外膜が大小の骨片となって浮きあがっていた。その状態は、自然の剥離とは異なり、外部からの衝撃を受けたことによるものと判断されるものであった。後頭骨が、めく

れるように破壊していたことは、それを裏付けるものといえよう。埋葬に際し、前頭部に銘籠が加えられた事は、多量の櫛の着装と併せて、2号人骨の性格が問題視されるのである。

### (3) 遺物の出土状況(第19図・図版16, 17)

9号墓に副葬された遺物には、剣・刀子・鉄鎌、滑石製平玉と、頭蓋骨付着の櫛があった。櫛は、玄室入口から右袖にかけて3号人骨の南側に壁面と並行した1振と、奥壁中段の棚上に置かれた2振の合計3振が副葬されていた。いずれも東西方向に、柄を東にして安置されていた。棚上の剣は、20cmほどの間隔をおいて棚の両端にあったが、東側の剣先部分には、鉄鎌3本が、鎌身を東にして、まとめた状態で置かれていた。従って、鉄鎌の刃の部分は、西側の剣に重なっていたはずであるが、痕跡は確認できなかった。

刀子は、東側壁のほぼ中央上部に、右から左方向に刃を上にして斜に突き刺してあった(第19図・図版17)。その位置は、2号人骨の頭蓋骨のほぼ真上に位置しており、副葬というより、除魔封禁等の呪的意図をもって突き刺したものと考えられる。

滑石製平玉は、1号人骨の左腕の腕骨と尺骨の中央付近に、二連の連鎖された状態で付着していたものである(第22図・図版16)。埋葬時に、左腕に着装していた事を明示しており、しかも、平玉の過渡状態を確認できる貴重な出土例である。

櫛については、付着状況および記述した通りである。

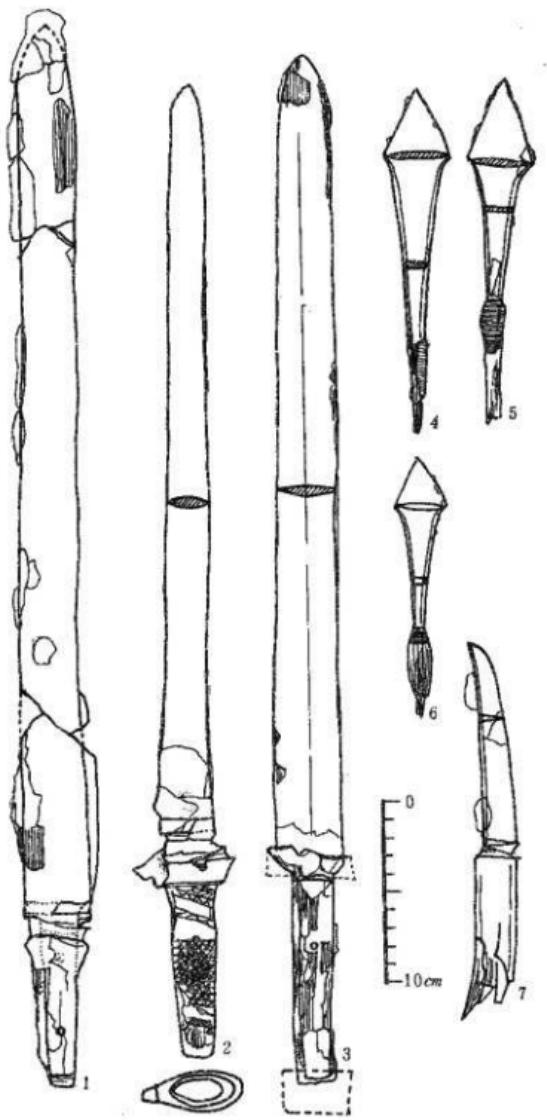
### (3) 遺物

#### 剣(第21図①～③、図版16・20)

① 3号人骨、南側の出土品。剣先近くと手元の2ヶ所で折損する。3振の中では最長の剣である。現存長58.5cm、剣身長は49cm、身幅は3.4cmを測る。錆化が著しく、剣身の鍔については明瞭でない。茎は長さ9.5cm、茎幅1.5cmと細い。茎尻から3cmの位置に目釘孔をみる。鋒先に納木の木質残痕を見る。

② 棚上西側の出土品。全長54cm、剣身長は42cm、身幅は元近くで3.2cm、中程で2.4cmと次第に狭まる。3振の中でもっとも細身の剣である。身元に鞘口金具の一部が銹着する。①同様、鍔については明瞭に認めがたい。茎長は1.2cm、柄長から6.5cmの位置に目釘孔を認める。柄には、柄木が添えられ葛巻されている。柄元に鹿角装の柄節が銹着している。

③ 棚上、東側の出土剣。全長57cm、剣身の長45cm、茎長1.2cmを測る。目釘孔は茎尻から7.5cmの位置に1孔をみる。剣身幅は、元幅3.9cm、先幅3.5cm、箟筋の通る剣である。身厚5mmを測る。茎幅は元幅2cm、先幅1.5cm、所々に柄木の木質が付着する。本剣も②同様、柄鍔を装具していたらしく、柄元に角質の残痕を見る。また、棚上にあるとき、柄頭に



第21図 9号出土の剣・鎧・刀子実測図

円錐状の鹿角装の痕跡が認められた。劍身の保存度は良く、芯鉄も健在と考えられる。

鉄鎧(第21図④～⑤、図版20)

先端が三角形を呈する平根菱形の大型鎧2本とこれより小形の同型鎧1本がある。

④ 鎖身長3.7cm、最大幅3.8cm、関なく鎧被と茎の区別がない。茎の元から4～5cmほどが矢柄に刺しこまれ緊結固定されている。鎖身から鎧被への移行は、稜角から内反り気味に括れながら狭まり長三角形の鎧被となり某へ移行する。矢柄装着部分をのぞく鎧被の長さは9.5cmを測る。重量5.9g、平根菱形鎧としては軽量に属する。

⑤ 鎖身最大幅3.8cm、鎖身長4.6cm、④にくらべ鎖身の伸びがみられる。刃長4.8cmを測る。7cmの矢柄固着部分を除き、鎧被の長さ7cmで、鎖身の長い割には、④より短かくなっている。茎の矢柄装着部分の長さにさほど差がなければ、鎖身の長くなった分、鎧の全長が短かくなっていることも考えられる。鎧の断面形は厚さ3mmの長方形となる。重量は④と大差なく5.8gである。

⑥ 4と5にくらべて小振の菱形鎧である。鎖身長2.6cm、鎖身幅2.8cmと正三角形に近い形態を示す。稜角から内反りしていくびれる鎧被部分の長さは6.5cm、矢柄を装着する茎部分は鈍化膨張する。茎長約5cm、重量は3.3gである。

刀子(第21図⑦、図版17・20)

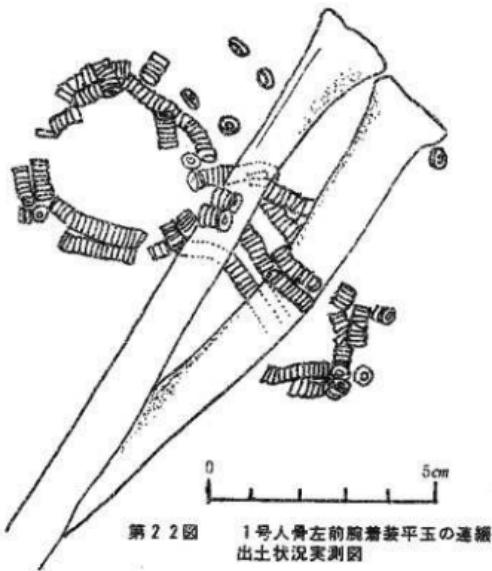
鋒先4cmほどが墜面土中にあったため、先端部に錆塊を見る。錆化の割には刀身の損傷は少なくほぼ完形を保っている。刀身に反りがあり長1.1.7cmを測る。身幅は、元幅で2.1cm先幅1cm、鋒はふくらつく。棟厚5mmを測る。

茎には、鹿角製の丸柄が着装されたため茎長は計測し得ないが、4cm前後になるものと推測される。着装された角製柄は、先端部が崩壊し剥けていたため原形は定かでないが、断面卵形を呈する1.0cm前後の長さの柄であったとおもう。柄の断面径は2cmである。今回須木で出土した8本の刀子の中では、唯一の棟反りのをもつ整った形態の刀子であった。

滑石製平玉(第22図、図版18)

淡い緑色乃至灰緑色を呈する滑石製平玉である。平玉の直径は4～4.8mm、(平均値4.52mm)厚さ0.8～1.6mm、(平均値1.22mm)が計測される。玉の中央に穿孔された孔径は1.3～1.9mmの範囲にある。玉の厚さは厚薄一様ならず、中には片側が極端に薄くなり三角形の側面形を呈するものもあるが、全体としては精巧な滑石製平玉といえる。玉の総数は362個、一連に纏った時の長さは4.3cm、二連にした際の輪径は7cm前後である。

地下式横穴の装身具としては、滑石製平玉は類例が少ない。しかも、二連縁の胸飾として



第22図 1号人骨左前腕着装平玉の連続  
出土状況実測図

着装した使用状況を明示し得る資料として貴重である。

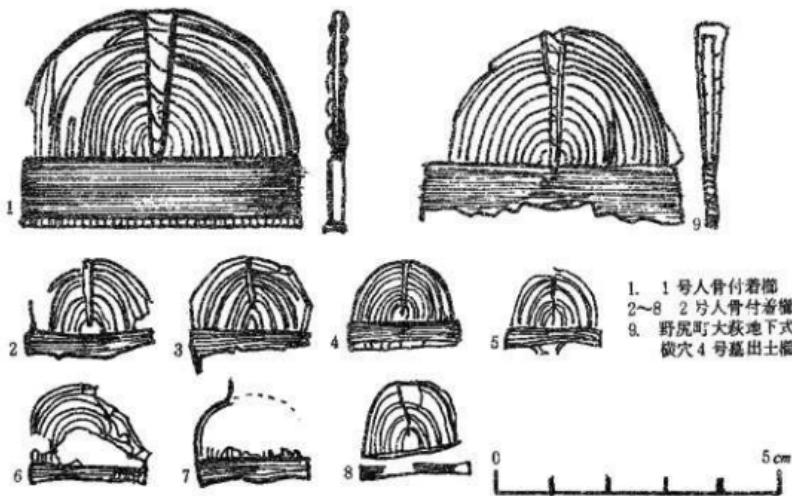
櫛(第23図・図版18・19)

大小合せて10個の竹製堅歯が出土している。

① 1号人骨の前頭骨に付着しているものである。すでに竹の本体は消滅し漆の外膜のみが残るものであるが、ほぼ櫛の原形を遺している。幅4.9cm、長さ3.7cm、厚み2mmの半円形のつまみをもつ歯である。中央をかがった16本の竹ヒゴを湾曲させ、円弧の頂点から2.5cmから3.9cmにかけて糸巻緊縛し、漆をかけたものである。頭蓋骨に残る痕跡から歯の長さは1.3cm前後が推測される。歯先は7cm前後の広がりをもっていたことがうかがえる。従って、結髪の生え際に挿れても容易に抜け落ちることもなく、額に半円のつまみを見事な飾として誇示したことが理解できるものであった。

これまで、地下式横穴からは、西諸県郡野尻町大荻地下式横穴群の4号墓に出土例がある(第23図④)。折り曲げられた竹ヒゴの数や緊縛状況、規格等、須木1号人骨付着の歯に遜色ないもので、共に堅歯として優品に數え得るものであろう。

②～④ 2号人骨に付属した小型の堅歯である。つまみの幅2cm、長さ1.5cmの大きさのものと、幅1.7cm、長さ1.3cmのより小型の2種類がある。いずれも使用竹ヒゴは6～8本をU字形に折り曲げ緊縛しており、12～16本の歯を容した堅歯であったことが推定される。歯の長さについては痕跡もなく、断定の根拠がないが、つまみの3～4倍の長さをも



第23図 櫛実測図

った1号人骨の大型櫛から類推すれば、5~6cmの櫛歯をもっていたのではないかとおもわれる。

#### (4) 小結

梯形状の平面構成をとる9号墓は、長方形あるいは隅丸長方形の平面形態の多い須木地下式横穴群の中では、孤立した立地とも関連して異質の地下式横穴墓であった。この墓室の形態の違いが時期差によるものか、あるいは、被葬者の性格に起因するものか俄に断定し難いところである。埋葬人骨が、神靈の憑依する呪具とされる櫛を着装し、且つ、左腕に祭祀具ともみなされる滑石製平玉の腕飾を着装していたことは、被葬者を巫者とする要素は強く、9号墓そのものが巫者一族の墓室の可能性があり、性格に基く特異性が強調されている。

9号墓の剣・鉄鎌・刀子を基本とする副葬品の組合せは、西諸県郡高原町旭台地下式横穴群の副葬品組合せに類似が求められ、櫛と平玉の保有は、旭台墓群の主軸となる9号墓の貝輪と銅に対する対比され、階層分化の顕著でない共同体社会の中での首長的位置を占めた被葬者の性格を反映しているものといえる。ことに、櫛の出土例は多いと云うものの、出土墳墓が、特定の墳墓に限られる傾向のあることは見逃せない点である。地下式横穴の場合も、これまでに300を越す遺構が発見調査されながら、野尻町大荻地下式横穴群<sup>(5)</sup>14号墓の1例があるに過ぎない。須木地下式横穴群の中での9号墓の位置づけが重視されるのである。

9号墓の出土遺物には、時期比定の決め手となる資料に欠けるが、剣・鉄鎌・刀子を基本

とする副葬品の組み合せからは、旭台地下式横穴群にもっとも近い年代観が与えられる。旭台墓群は、13基で構成されていたが、その中には3基の装飾墓が含まれ、古墳時代後期前半の築造とする年代観が与えられている。<sup>(6)</sup>

須木9号墓でも、直刀を伴なわないこと、鐵錐に長頭錐が含まれないこと、それに、櫛の副葬品例や、滑石製品の出土例を考慮すると後期後半におし下げる要素は少なく、後期前半とする旭台の年代観に相当する時期の築造とみるのが妥当かと考えられる。

#### 註

- (1) 昭和46年日高正晴氏調査。実見、追葬骨1体を中心にして、初葬骨3体分が集骨されていた。
- 金環・貝輪・刀子・土師器・須恵器が副葬されていた。(未報告)
- (2) 開館記念展「群馬のはには」 群馬県立歴史博物館(54年)
- (3) (2)に同書
- (4) 石川・日高・岩永、「旭台地下式古墳群発掘調査」 宮崎県文化財調査報告書  
19集 財政委(51年)
- (5) 48年に15基が緊急調査され、現在まで36基が発見調査されている。
- 14号墓には直刀・剣・刀子・貝輪に伴って櫛が出土している。(未報告)
- (6) (4)に同書

#### (5) 9号墓被葬者の性格について

9号墓埋葬遺骸に、着装の櫛がそのままの状態で頭蓋骨に付着していた事は、従来、埴輪人物像からしか推定できなかった古墳期の櫛の使用状況の実証例として貴重な発見であった。なかでも、1号人骨(女性)の大型櫛の付着状態は、群馬・觀音山古墳をはじめ、関東各地の埴輪女性像の額に表示された櫛の着装そのものであった。このことは、期せずして、東西遼遠隔の地に共通の習俗の存在を明らかにすることになった。しかも、埴輪女性像の櫛着装が、巫女の象徴と考えられていることは、1号人骨の性格を考える上で興味深いことといわねばならない。

ところで、2号人骨は男性にも拘らず多量の櫛を着装していた事は驚きであり、かつ異様であった。男性にも櫛着装の行なわれた事は、記紀に描かれたイザナギノ命黄泉国訪問の条における左右の美豆良に刺した湯津津田櫛の例を引くまでもなく、橋本塚・土廻り鏡塚古墳における熟年男性の副葬品例や、八代市大鼠蔵山古墳1号棺の熟年男子4号人の例など、いず

れも男性でありながら櫛を着装していた例である。しかし、須木2号人骨の9個の着装となると、単に豆蔻に挿したものとは様相を異にする。しかも、後頭部を覆むように遺存した有機物は、「かずら」とも考えられるだけに、一種の女装がなされていたのではないかとおもえるのである。この点、朽木土廻り古墳で、毛髪束の出土していることは「かずら」とも関連して注目される。男性の女装例として引用されるのは、やはり記紀に描かれたスサノオノ命の「八俣遠呂知」退治のドリである。「奇羅田姫を湯津爪櫛にとりなし、みずらに挿す」行為は、櫛が女性の象徴であり、かつ、櫛に託された靈力が重視されていたあらわれといえよう。それだけに、須木2号人の性格が、前頭骨に遺る異常な亀裂と共に、一層問題視されてくるのである。

ところで、古墳からの櫛の出土例は多く、県内でも、延岡市の大下古墳の14個の副葬例<sup>(6)</sup>や、同じく延岡の大賀淨土寺山古墳の粘土棺に発見された大小38個の出土例<sup>(7)</sup>が挙げられる。全国的になると出土例は数多く、直に集成の困難なほどである。ただ、被装者の性別や実際の着装の確認できる例となると稀である。同様に出土例の多い割には、詳細に検討すると、かならずしもどの古墳からも出土するといった普遍性は少なく、特定の古墳に集中して埋葬されている傾向が指摘できるのではないかと考えられる。

例えば、熊本県八代市の大鼠藏山古墳1号棺の男女5体の人骨に櫛15個の出土例<sup>(8)</sup>、大分県世利門古墳における集合遺体を含む8体の合葬墳の例<sup>(9)</sup>、同じく大分県の下山古墳や千人塚古墳など、いずれも合葬墳で櫛を伴っていた例である。或は、13個の櫛を出土した奈良県、谷山古墳群2号墓<sup>(10)</sup>のように、群の中で1基に保有されていた例など、櫛が特定の被葬者や、その家族構成員と限定されていた事を示唆するものと考えたい。

こうした背景には、櫛が単なる装身具でなく、今日でも多くの俗信を有するように、神靈の憑依する呪具として、それを挿すことは特異な靈力を保持する者の象徴とする考えが存在したからではなかったのか。そこに、神慮を奉持し、櫛の占有を許された巫者集団の存在が考えられるのである。この巫者集団の構成者こそ、特定古墳に合葬された被葬者たちだとおもえるのである。同様に、櫛を伴なった9号墓も、須木の共同体社会の中で、櫛の占有を認められた巫者一族の合葬墓ではなかったかとおもう所以である。

2号人骨にみる異常な前頭骨の亀裂、3号人頭蓋骨の破碎、そして、東側壁の刀子の突き刺しなど、いずれも生前に畏怖した巫者の死靈への恐怖に起因する封禁行為と考えられる。

ところで、巫者に関する事象の中で、神慮を受ける巫女と民衆の間に介在し、神意伝達の役割を負ったとする「客神者」なる男性巫の存在や、沖縄のイザイホウの神事にみる祭事權

(12) を司る根神とその上に立ち全てを掌握する根人の関係などは、9号墓の男女の被葬者の性格を考えていく上で興味深い問題といえる。

9号墓の被葬者が巫者であれば、年若い女性であった1号人骨こそ、神がかりして神意を受ける巫女であり、年老いた男性2号人骨は、女装することにより性を超越した双性の巫者として、「審神者」的役割をもって職業し、須木共同体社会の中で畏怖されていたのではないかとおもうのである。そうした畏怖が、彼等の死に際し、埋葬することによって、その再生と死靈の駆除を封する行為が、頭蓋骨への即打衝撃を加えることになり、封禁の呪詛をこめた刀子の突き刺しとなつて表示されたものと考えたいのである。

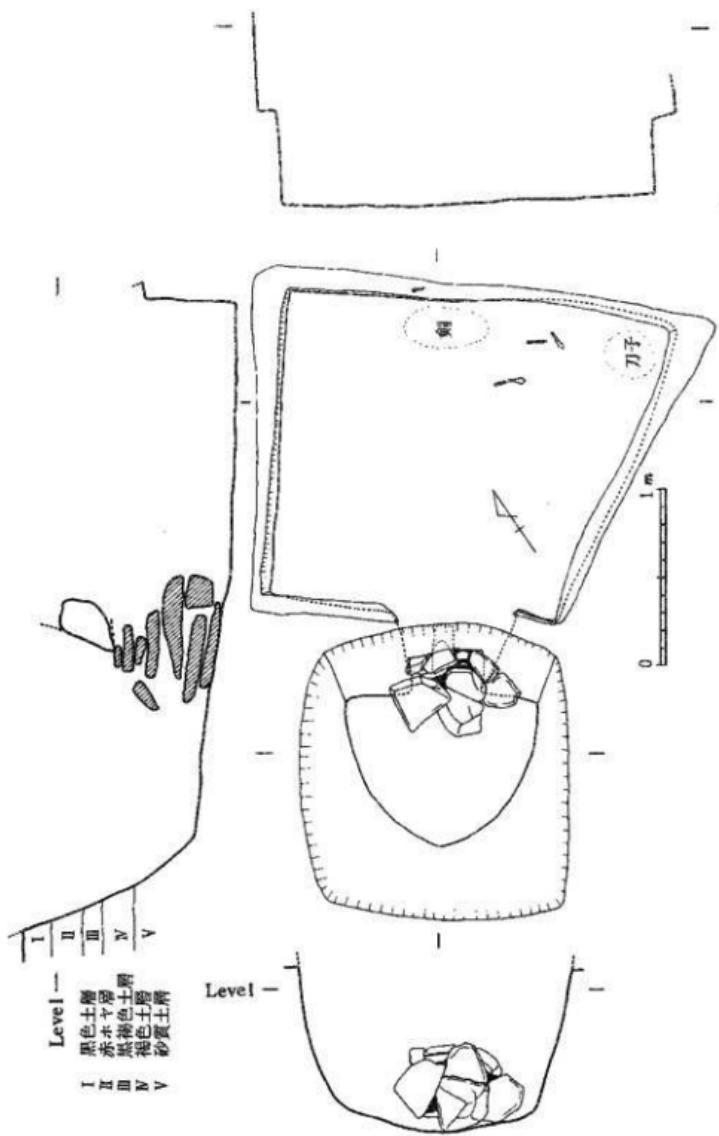
#### 註

- (1) 丸山三郎著「古事記」(1965)、「日本書紀」日本古典文化大系(1974)
- (2) 大和久震平「土廻り鏡塚古墳」(1974)
- (3) 乙益重隆「八代市大風巣山古墳—肥後における箱式石棺内合葬の例について—」  
考古学雑誌41巻4号(1956)
- (4) (2)に同書
- (5) 烏居龍藏「上代の日向延岡」(1935)
- (6) (5)に同書
- (7) (3)に同書
- (8) 貢川光夫「五道敷以上合葬の一例—大分県大分村大字木上字世利門古墳—」  
考古学雑誌44巻1号(1958)
- (9) (8)に同書
- 00 櫻原考古学研究所編「新庄大野谷山古墳群」  
奈良県文化財調査報告書31集(1979)
- 00 上田正昭「日本神話」(1970)
- 00 島越憲三郎「巫女の歴史」「諸座・日本の民俗宗教」(1979)

#### 1.1. 第10号地下式古墳

##### (1) 遺構(第24図)

背後に7・8号を控え、5・6号とともに半円状の分布を示す。主軸方位はN 34°Eである。表土が薄かったためか玄室は自然陥没して久しい状態を示していた。解坑へ玄室奥の床面全長は310cmを測る。



第24圖 第10號地下式古墳實測圖

堅坑は、上部を広く掘削し、坑底まで緩傾斜をなす。坑底は狭く、底辺110cm高さ90cmの三角形状を呈している。地表から坑底までの深さは126cmを測る。閉塞石は通道に7~8段積みしており、それに堅坑側から大きな石2個を立てかけている。

通道は、入口が狭く40cmの幅しかないが、玄室に向かって70cmにまで広がっている。長さはほぼ50cmである。

玄室は、両袖（左片袖に近い）平入りの形態で、奥壁の広い梯形状を呈し、四壁に棚状施設を設けている。計測地点での床面計測値は長さ175cm、幅205cmである。棚状施設は床面から40~50cmの位置にあるが、不整形である。

## (2) 遺物(第24・25図)

人骨は確認できなかった。

副葬品として、玄室奥中央付近に剣1振、玄室奥右壁寄りに刀子1本、奥壁棚上に刀子1本、奥壁寄りに鉄鎌2本が発見された。

### 剣1振(第25図1)

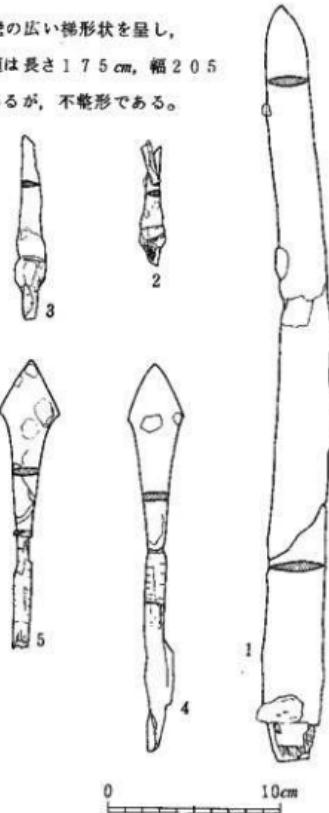
総長43.7cm、剣身長41.6cm、身幅3.2cm、厚さ0.6cmを測る。銹化が著しいため、明確ではないが剣中央に鏽があるようと思われる。関から24cmの所で、5°程度の屈折がある。いわゆる蛇行剣と考案されるもので、全国的にも出土例が少ない蛇行剣に新例を加えたことになる。

### 刀子(第25図2・3)

2は、奥壁の棚上にあったもので、小型刀子である。総長6.9cm、身長4.6cm、身幅中央で0.9cm、棟幅0.3cmを測る。刃先に竹と思われる径0.5cmの植物が銹着している。3は総長10.7cm、身長7.0cm、身幅1.2cm、棟幅0.2cmを測る。柄部には装着した木質が残っているが、下地に樹皮様のものを巻きつけている。

### 鉄鎌(第25図4・5)

4は、総長22.4cm、鎌身10.8cm、最広部3.2cmを測る。5は、総長16.7cm、鎌身9.9cm、最広部3.4cmを測る。4・5ともに変形圭頭斧式である。



第25図 10号出土遺物実測図

第5表 上ノ原地下式古墳群一覧表

地下式 番号	出 土 物	刀 劍	刀 子	鍔繩	鍔	柄	玉	その他	数量	施 用 者	構 造				施 失 免			
											方 位	開 塞	床面形	天井形	棚状施設			
1			1						1	顎 面	N50E 巻 石 縫 み	門 前 袖	平 入 り	長 方 形	密 棲	右	奥	-
2	2	1	12				朱玉	2	顎 面	N54E -	"	"	"	"	右・奥・左	右壁・ 奥中央	-	
3		3	14						-		N35E 不 明	"	"	"	"	奥	-	-
4		2	3						2		N40W 巻 石 縫 み	門 前 袖	"	橢 円 形	不明	左	他は不明	-
5	1	1	4	1					-		S12E -	"	"	長 方 形	"	不明	-	-
6									1		S70E -	"	"	"	F-△	-	-	-
7		1							1	顎 面 縫 合	N65E -	"	"	"	"	-	-	-
8			2						1		N78E -	"	"	不 整 長 方 形	"	-	-	-
9		3	1	3	11	362			3	顎 面	N37E -	"	"	"	"	奥 左	奥 左	-
10		1	2	2					-		N34E -	"	"	"	不明	右・奥・左 手前(四方)	-	-
計	3	4	12	40	1	11	362		11									

## IV 結 語

今回発掘調査を行った七ノ原地下式古墳群について、いくつかの問題に分けてまとめてみたい。

### 1. 立地と分布

標高約390mの高位、かつ北東から南西にかけての傾斜面に所在するという点で、平坦地の少ない須木村の地形に制約を受けたものとはいえ、過去、幾多の緊急調査が行われた結果と比較して特異な点と考えることができる。西諸県地方の地下式古墳について群として把握できるものは、えびの市の島内、小木原、久見追、馬頭、小林市では、新出場、下ノ平、高原町では、旭台、日守、野尻町では大萩などがあるが、その多くは現在畠地として利用されているような洪積台地縁辺部に構築しており、それを通常のものとして従来考えられてきた。この内、高原町旭台地下式古墳群が、大萩遺跡を東方に俯瞰できるような標高330mの高位に位置し、かつ斜面に構築されていたこと、条件的に同一レベルで考察し得る地下式古墳群が存在したことは、分布論、編年論を展開する上に極めて貴重な資料を提供したことができる。また、昭和54～55年にかけて採土により緊急調査に至った高原町日守地下式古墳群も、やや低位ながら、丘地上に構築しており、同じ傾斜地兼造地下式古墳群に含まれよう。傾斜地における構築形態は、地形に撲滅される面もあり、基本的には山上に向かって掘り込む形態をとっているが、なおかつ傾向にそわない数基があることは、旭台でみられた如く、群構成の意識化を読み取ることができる。

西諸県地方は、地下式古墳分布上一つの地域型として把握できるが、この分布圏内に現在まで未調査の地域であった須木村も含まれることが今回の調査で明らかになった。

### 2. 遺構・遺物

今回調査の10基について、構造上は自然石による澳門閉塞法および半入り両袖玄室が共通しており、玄室天井形態からは寄棟造り(有欄)、ドーム形状に分けられる。被葬者数は遺存数だが合計11体、1基当たり1～3体である。7基中に遺存していた11体の頭位は、5基分8体が南東方向、2基分3体が北東方向であった。南東方向の高い比率は大萩地下式古墳群の例と合わせ興味深い。遺物は、総体的に少なく、直刀、剣、刀子、鉄鎌が主であり、5号から鉄斧、9号から櫛、平玉が出土している。また、寄棟形態に比し、ドーム形態に遺物が稀少であるのも通有の現象である。

2号の右壁及び奥壁中央において、朱の繪が見られ、他の地下式古墳とは性格的に若干異なるようにも感じられたが、今までいくつか発見されている地下式古墳における壁面の概念、系譜の問題とも関連して考究すべき課題であるので、ここでは特に取り上げないことにする。

各号の平面的な位置関係については、県指定の所在する隣接地の状況が全く不明であることから、群構造そのものについて論じる訳にはいかないが、10基について構成傾向を読み取ろうと試みるならば、基本的には山頂を志向して玄室が構築されているが、寄棟形態の1~3号(1群)、ドーム形態の6~8号(II群)、低位に位置し、有棚ドーム形態の9号(III群)に大きく分けられる。この他は、推定で恣意的になってしまふが、4号は、有棚のためI群に、5号はドーム形に近いとみられるので、II群に包括して考えられる。10号は棚状施設を有した比較的広い玄室を持ち寄棟造りとみられることから、隣接地に想定される他の一群に含まれる可能性も考慮しなければならない。

9号については、上ノ原地下式古墳群の中では特異な点が目立つもので、県内では初めて全国でも類のない頭部に豊饒を着装した状態での人骨が3体発見され、なお、頭部頸に刀子を打ち込み、呪術的性格の極めて高い地下式古墳であった。

### 3. 墓造時期

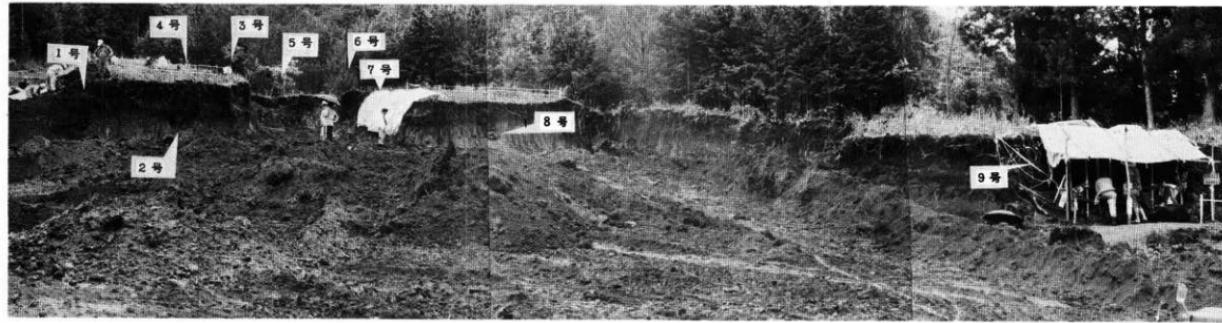
遺物の量が極めて少なく、しかも直刀、剣、刀子、鉄鎌、鉄斧、櫛、玉に限られ、編年基準となる遺物が見当らないので、困難な問題である。これらの中で、鉄斧、鹿角装剣が、中期的様相を呈しているのみである。また、10号出土の剣を蛇行剣と認定できるならば、地下式古墳出土は7例目となる。いずれも、各群集地から1本ずつの出土であり、蛇行剣の性格を知る上でも注目しておく必要があろう。畿内及び周辺地区出土のものは5世紀代高塚古墳のものであるが、地下式古墳は6世紀代のものとされているようである。

遺構の形態の面からも編年上の位置を考究すべきであるが、西諸県地方についても、形態によって一概に併し得ない問題もあり、複雑な様相を看取できるので今後検討する課題としておき、ここでは、5世紀後半から6世紀前半頃に比定しておきたい。

#### 参考文献

- 茂山 渥「大萩地下式横穴36号発掘調査」宮崎県文化財調査報告書第22集 昭和55年3月 宮崎県教育委員会  
田中 広「地下式横穴出土の蛇行剣について」日本考古学協会昭和51年度大会研究発表要旨

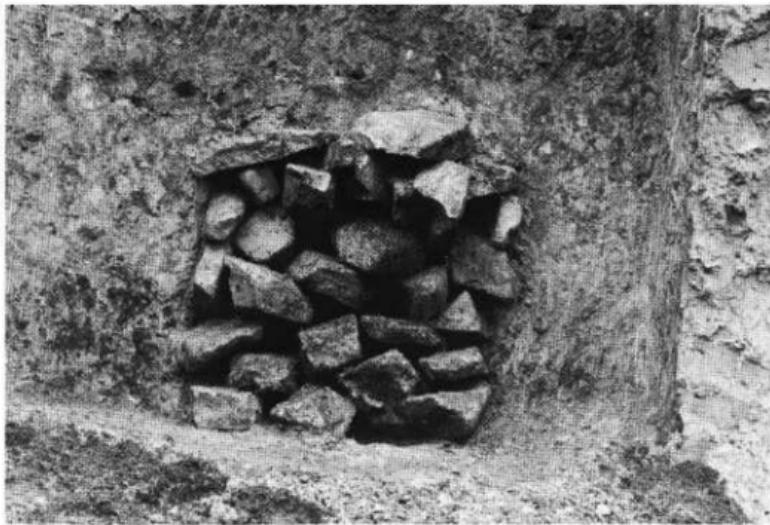




遺 踪 全 景

図版 2 土層の状態





(1) 後門閉塞石状況



(2) 玄室から見た閉塞石



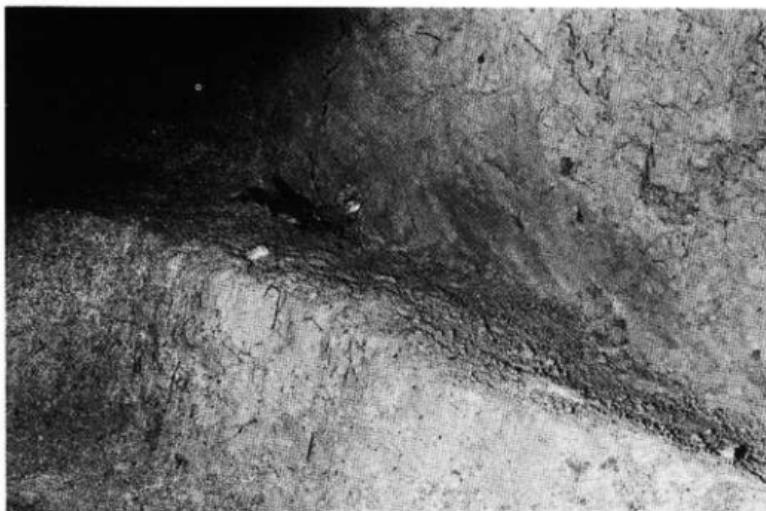
(1) 玄室 内状況



(2) 刀子 出土状況



人骨出土状況



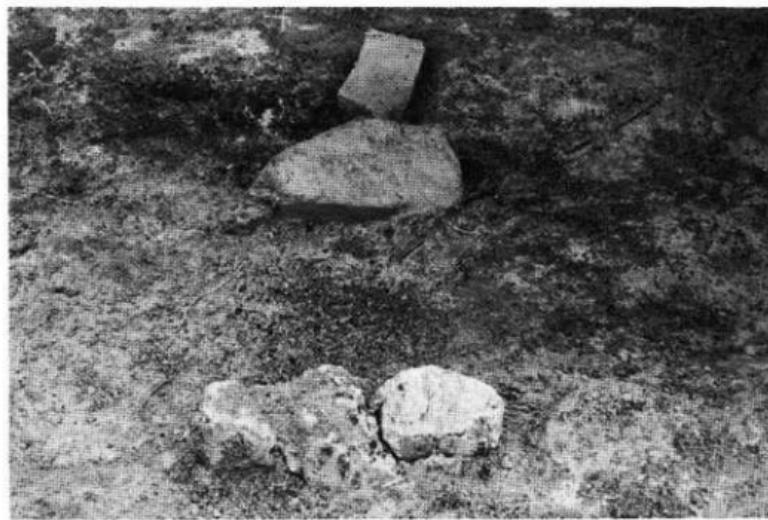
(1) 鐵鎗出土狀況



(2) 鐵鎗出土狀況



(1) 玄室 内 状況



(2) 玄室 内 置石 状況



(1) 穹坑部及び閉塞石



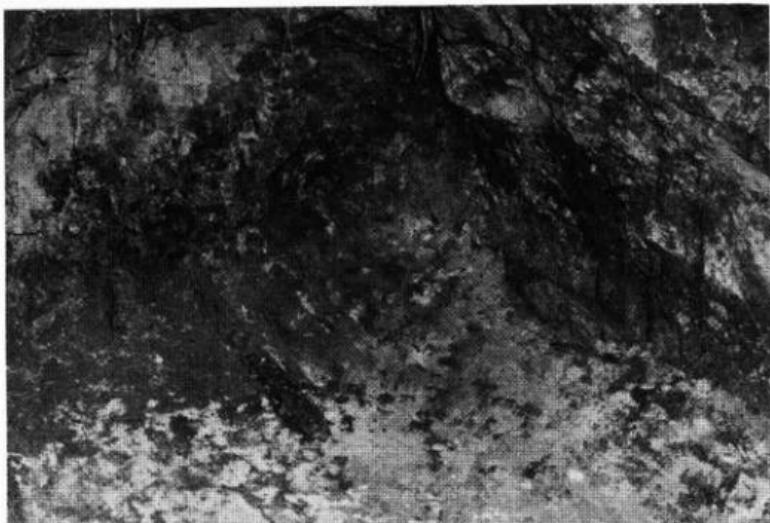
(2) 玄室内状況(手前・人骨)



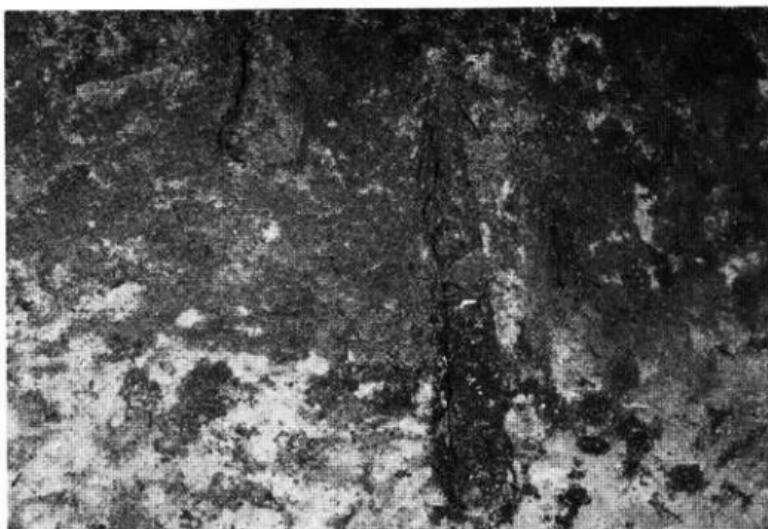
(1) 壴坑部



(2) 堵石及び玄室



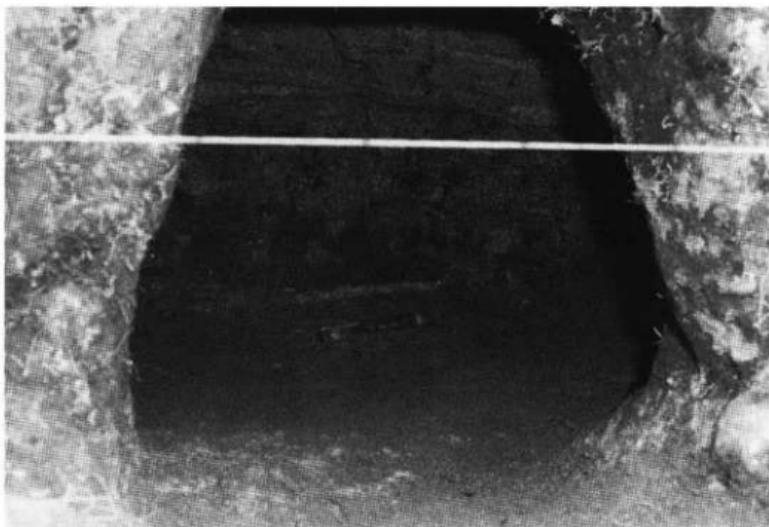
(1) 玄室内遺物出土状況



(2) 玄室内遺物出土状況（拡大） 左・鉄斧，右・剣



(1) 後 門 部



(2) 後門から見た玄室内



(1) 塞石状況



(2) 造構全景(左・玄室、右・整坑)



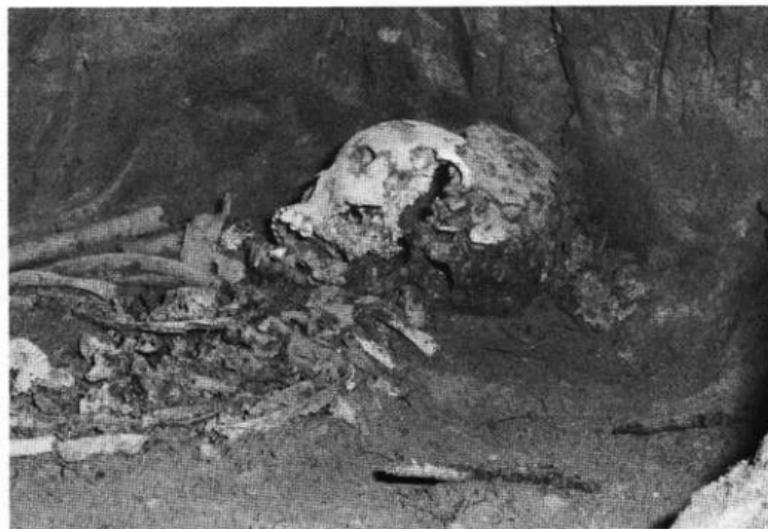
(1) 通 景



(2) 坑 部 閉 塵 状 況



(1) 後門から見た玄室内



(2) 玄室内人骨及び鉄鏃副葬状況

圖版 15  
第9号地下式古墳遺構閉塞状況



閉塞状況 1



閉塞状況 2  
堵石を除いた  
様子



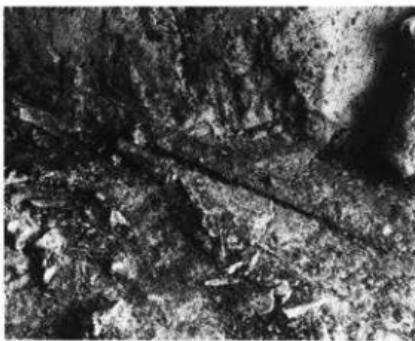
1号人骨の  
遺存状況



▲ 捜上の剣



▲ 平玉出土状況



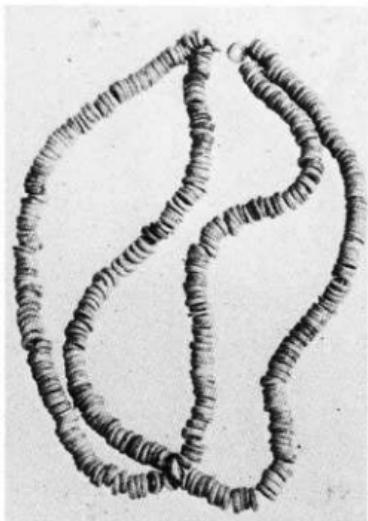
▲ 3号人骨と剣



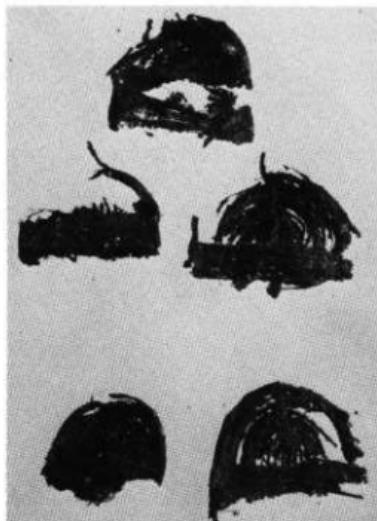
▲ 1号人骨と2号人骨



壁面に突き刺された刀子と2号人骨



▲ 1号人骨着装の平玉



▲ 2号人骨の構





1号・2号人骨の植付着状況



劍・鐵鎗・刀子



(1) 玄室 内状況



(2) 遺物出土状況(鐵針)